

畫譜

山水  
草木  
竹石  
降枝

二





畫筌卷二

目錄

漢山水

和山水

墨繪山水

雪中山水

真山水山水

真水

行水

草水

波

飛泉下向浪

瀑布勢

瀧勢

川流勢

青海波

池水紋

四時花部梅

灩澦

桃

海棠

櫻

棣棠

紫藤

月季花

畫筌卷二目錄



櫻草

雜腿兒

牡丹

碎米齋

土筆

蔓青

同黑土繪以上春

米囊花

蜀葵

燕子花

睡蓮

蘆

石竹

梔花

萱草

百合

山丹以上夏部

蓮花

秋海棠

黃蜀葵

鳳仙花

牽牛花

菊花

拐葉菊

淡紅菊 白菊 黃菊  
鮮菊 紫菊 菊蓋

木芙蓉

蘭并墨繪

浮蓋

桔梗

木槿

龍膽

胡枝

野菊

芭蕉

芭

楓樹以上秋部

枇杷花

南燭

水仙真行冊

山茶花

茶梅花

万年青以上冬部

描諸木大意圖

諸木降枝圖

岩石之圖

四時通用

描竹法

竹之圖

東坡竹圖

檀芝瑞竹圖

松

同茂枝

新羅松

蘆竹

吳竹

燒又篠

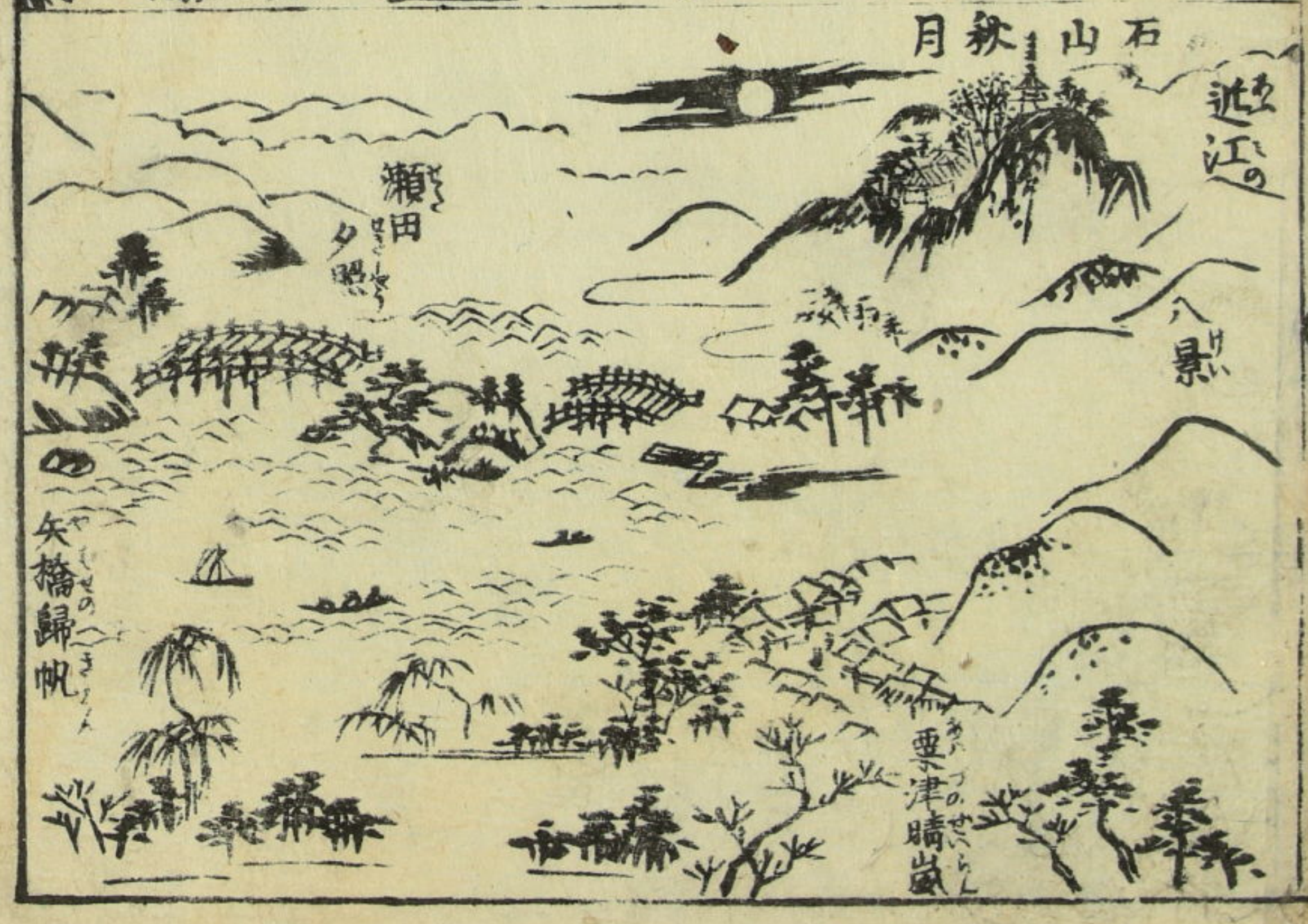
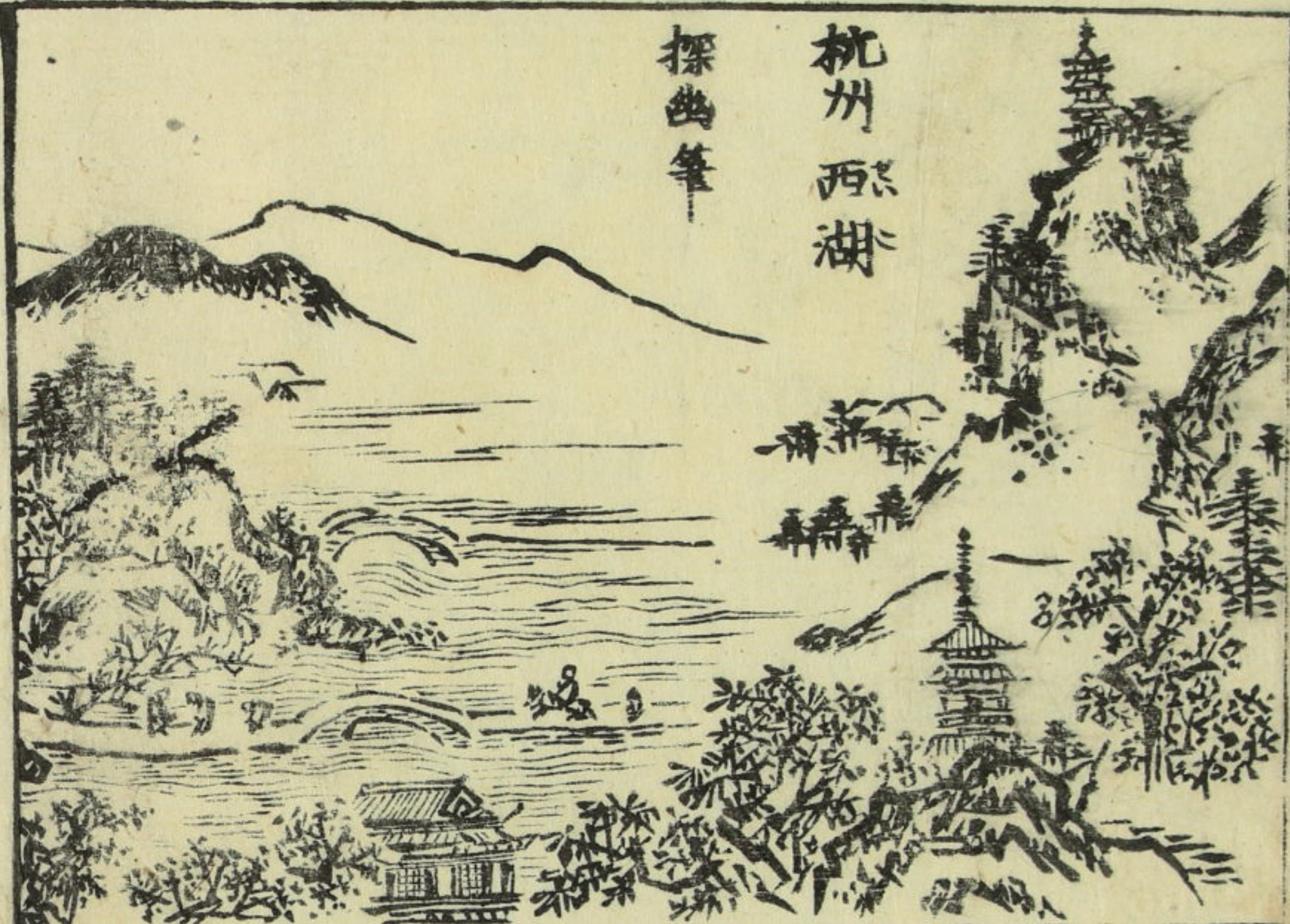
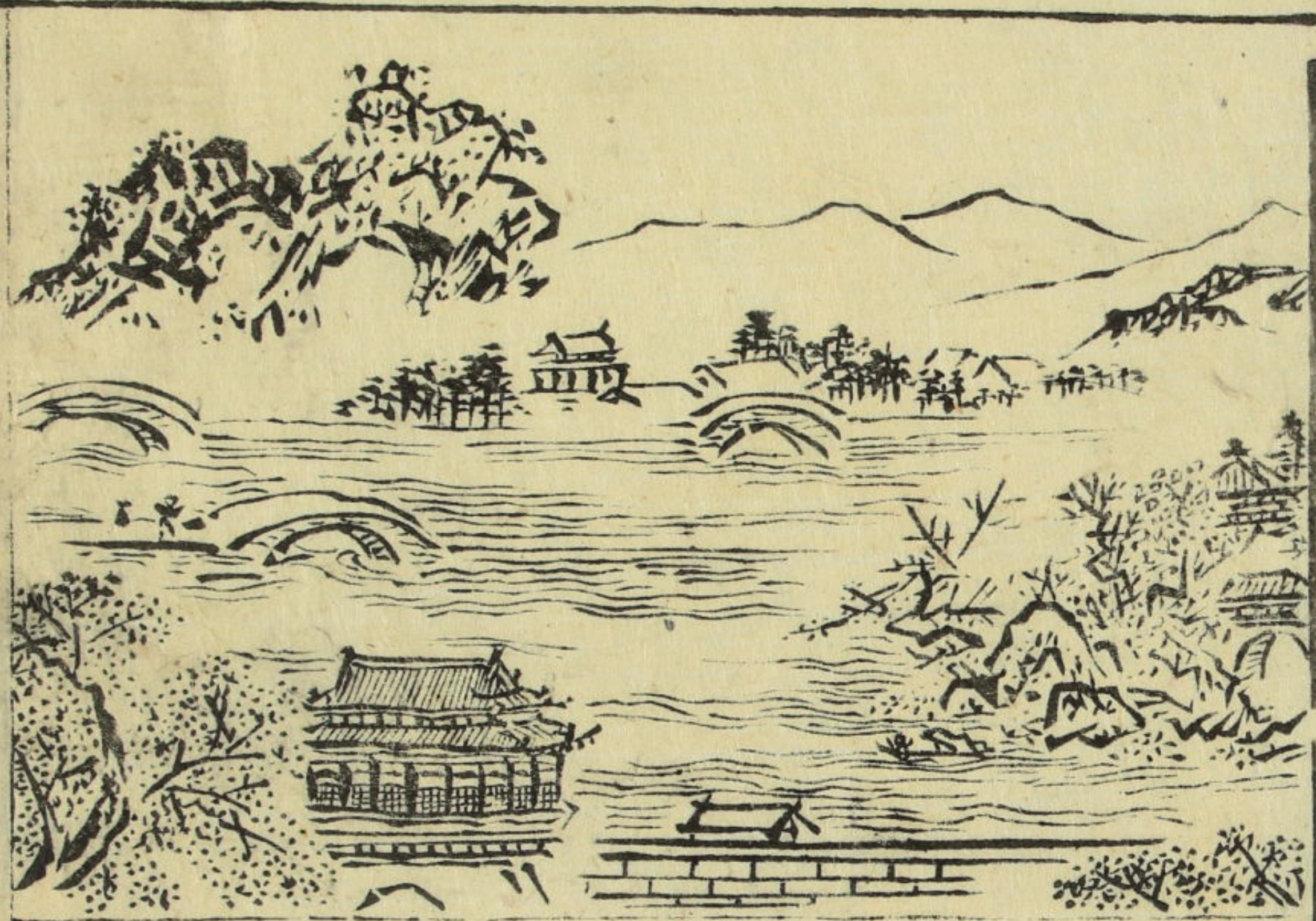
下州

苔

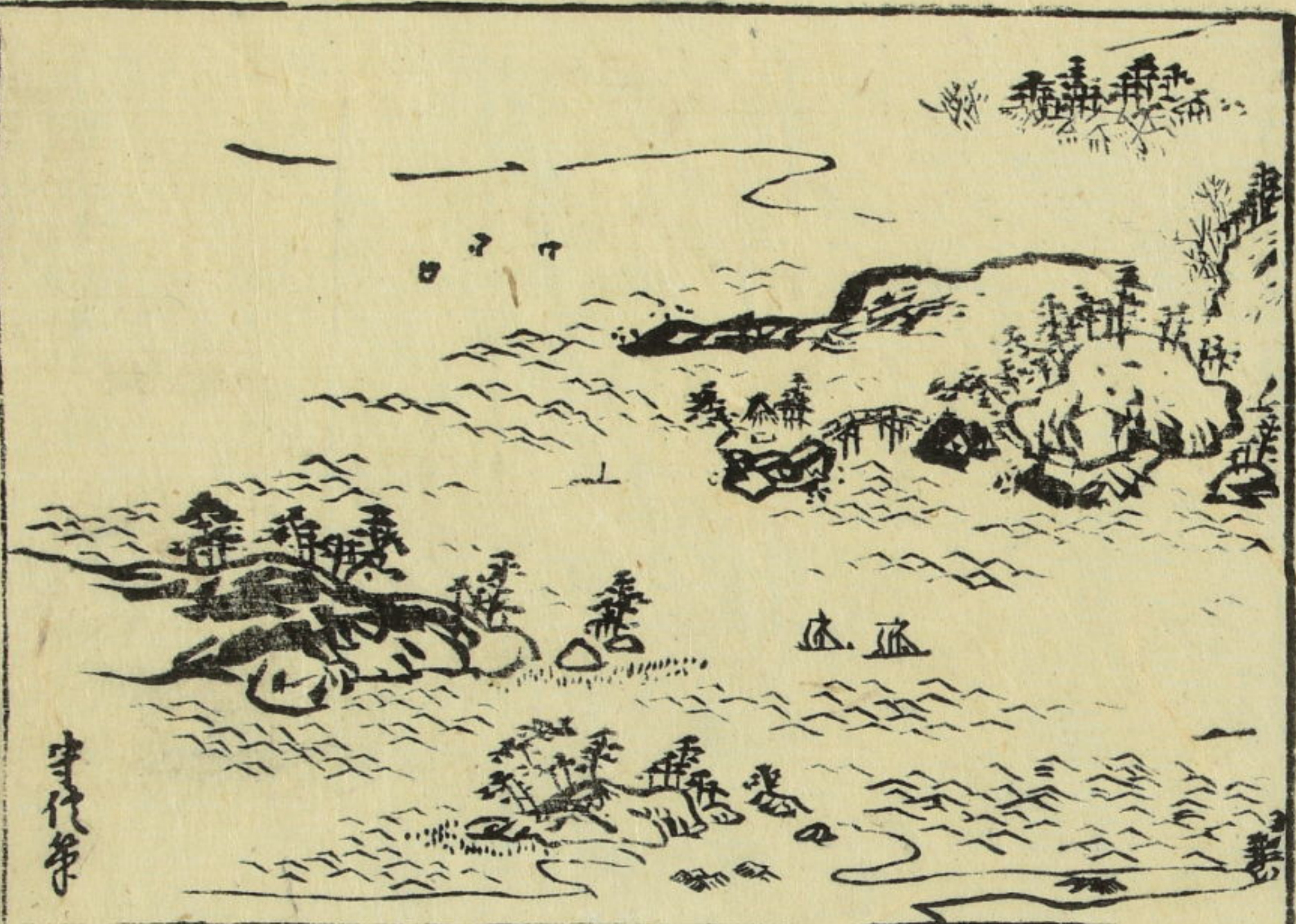




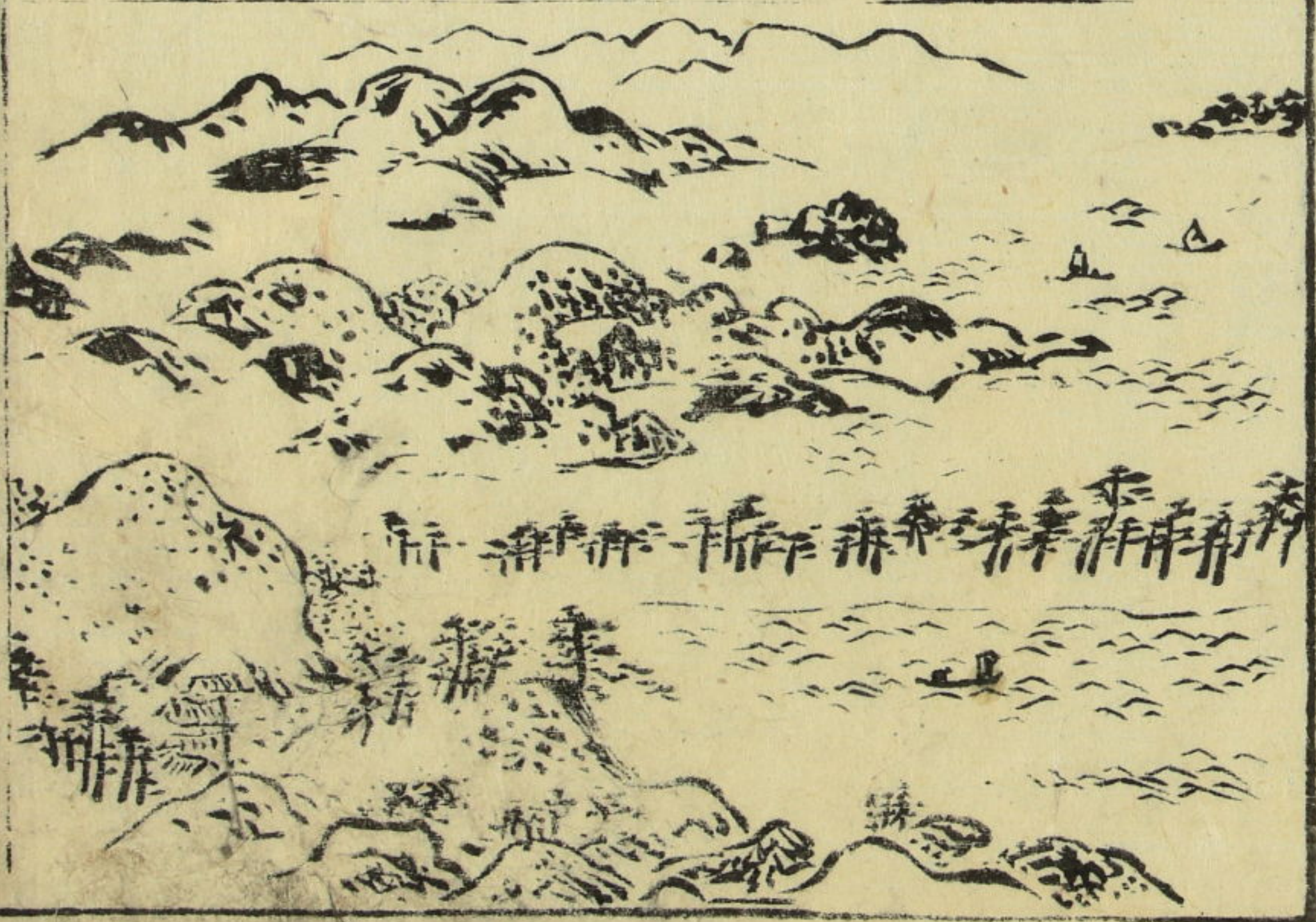




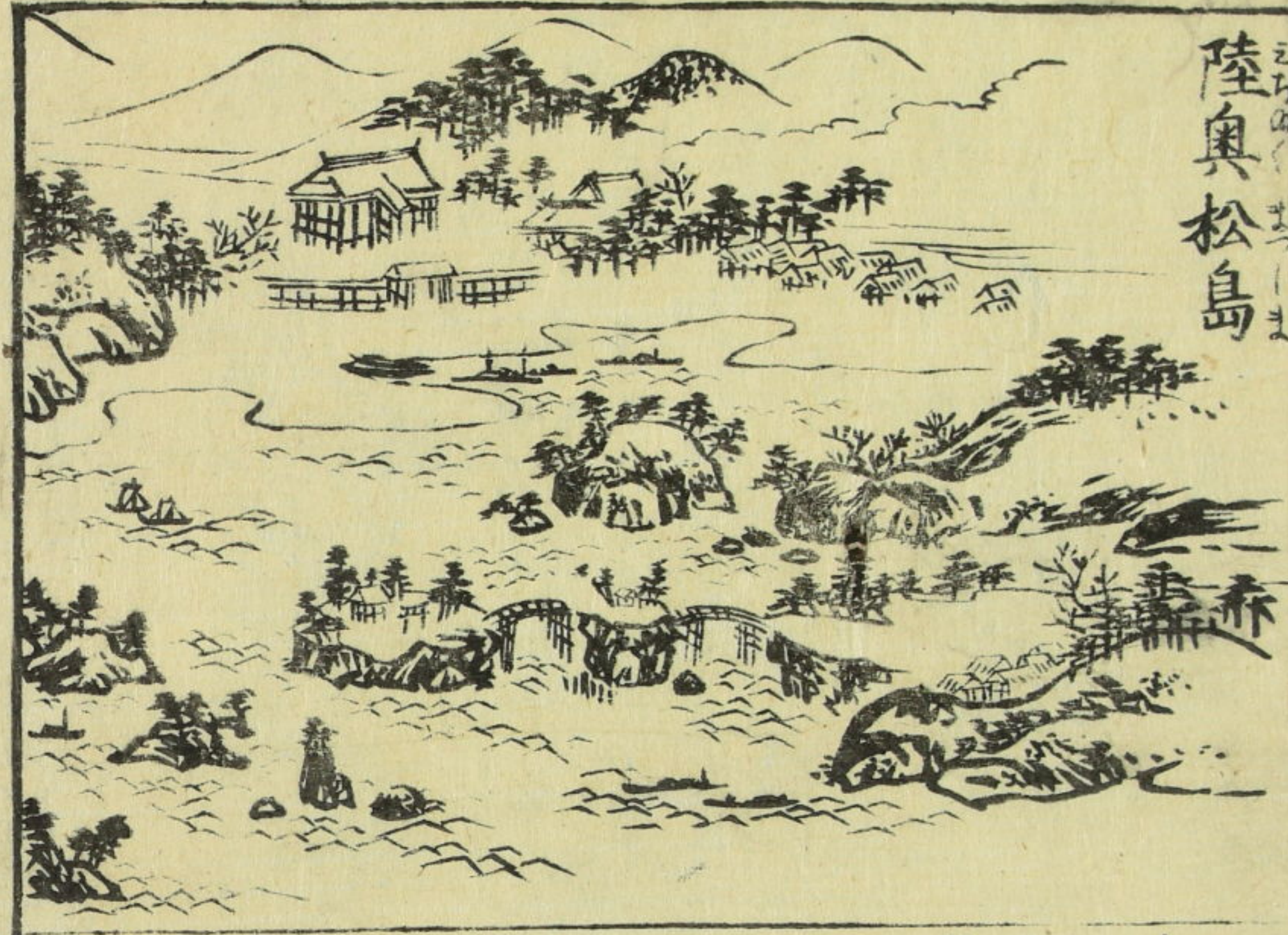




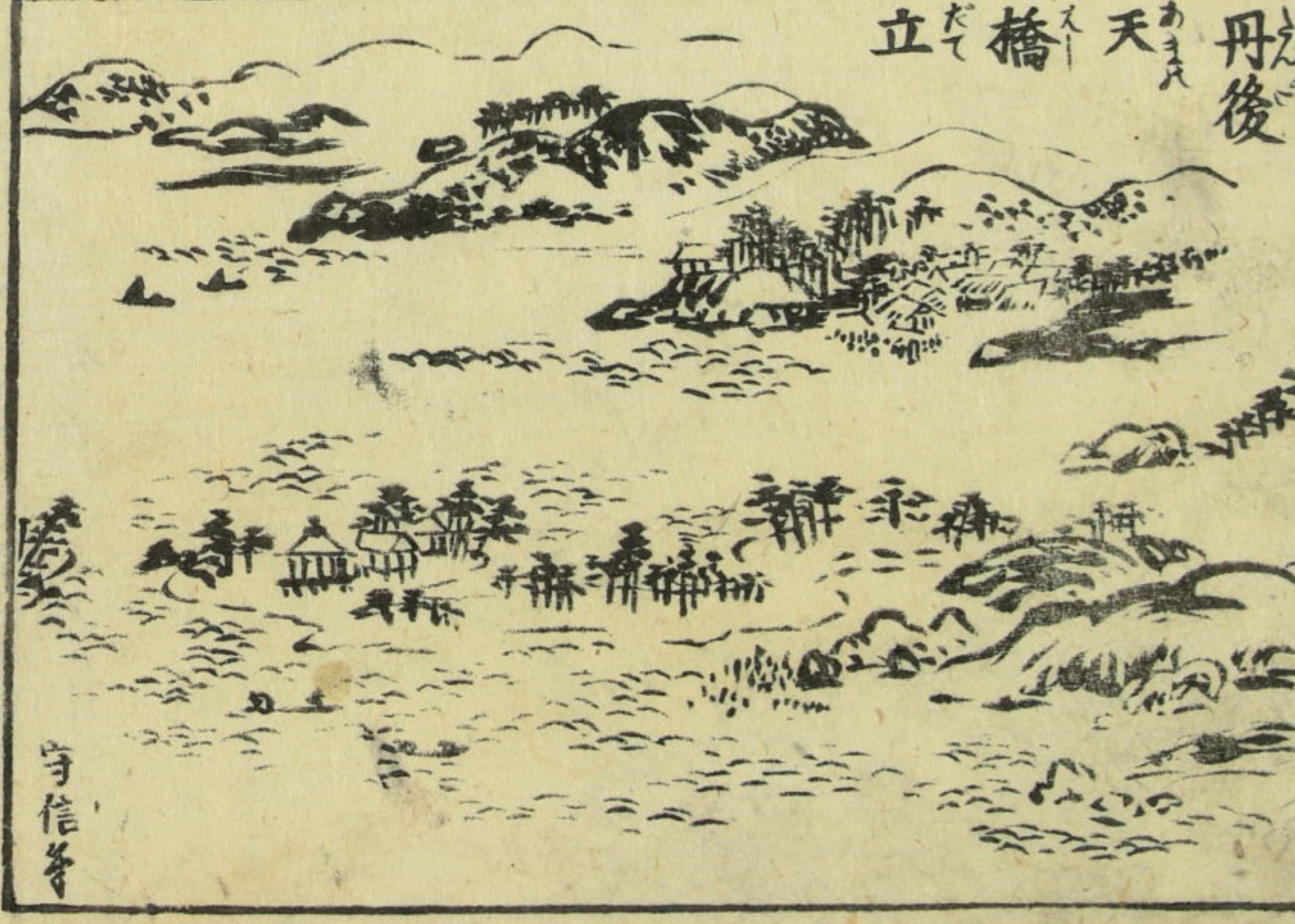
守代峯



陸奥松島



丹後 天橋立



守信峯

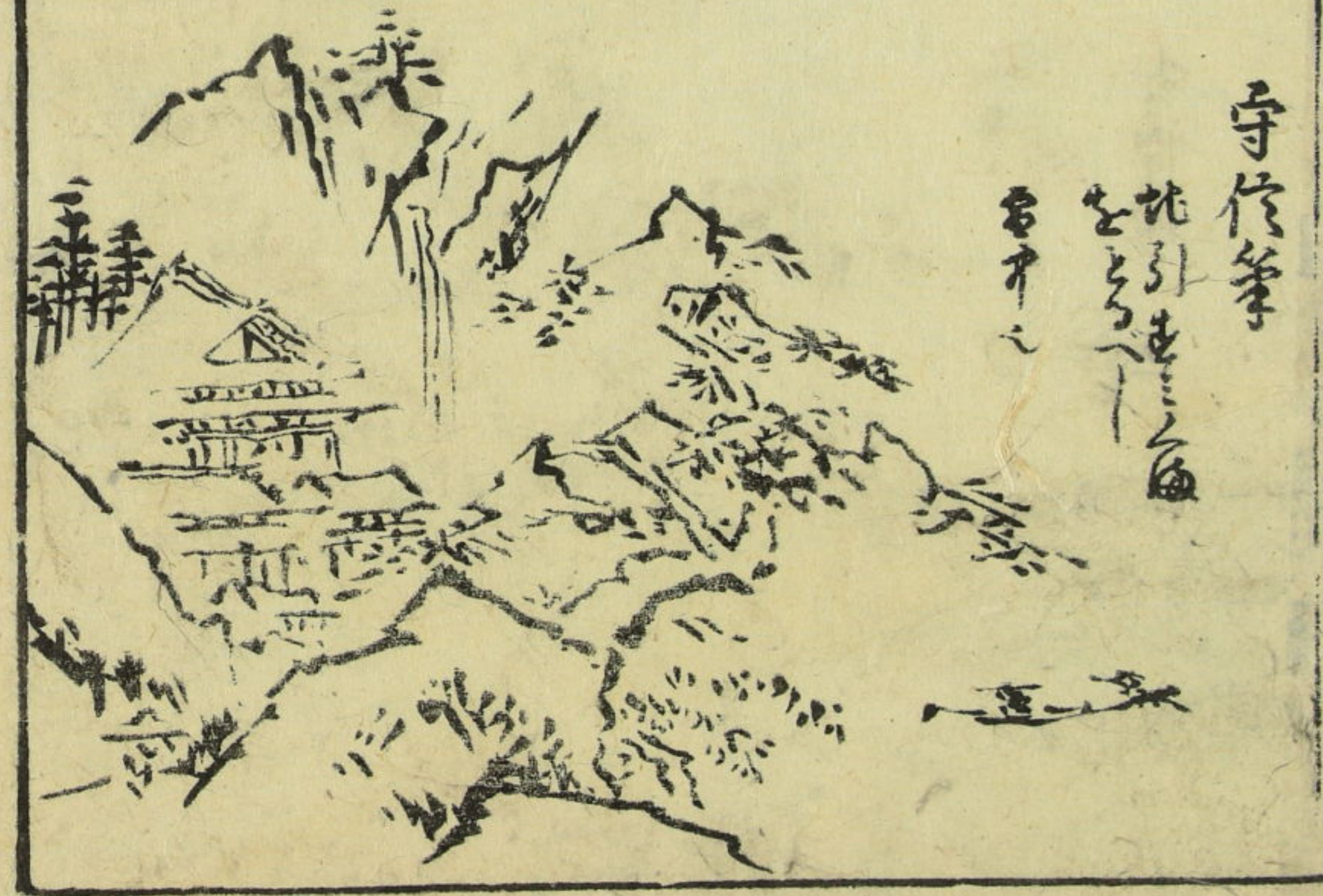


墨法の山水  
元信筆

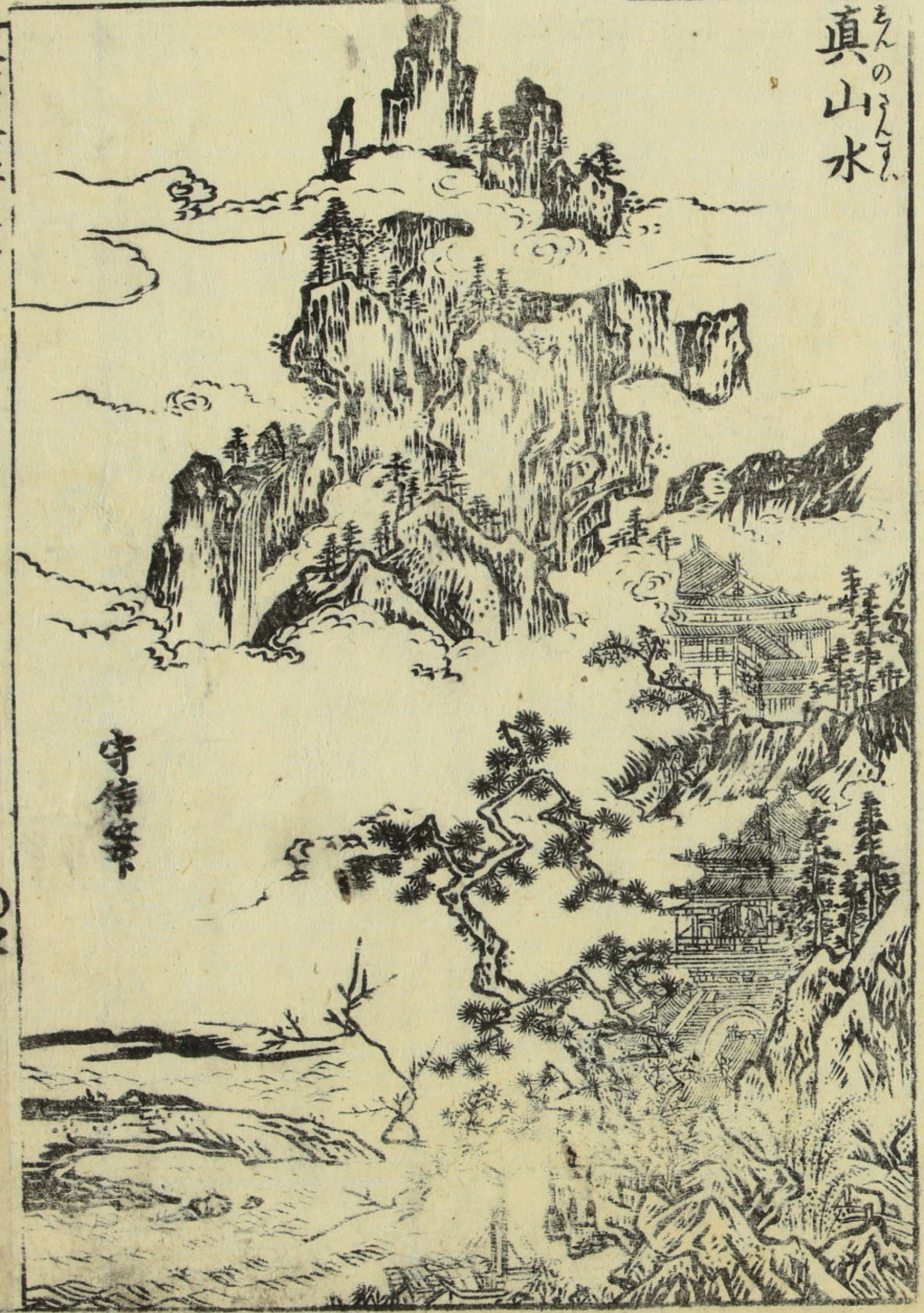


守信筆

北引の山水  
守信筆



真山水  
墨法

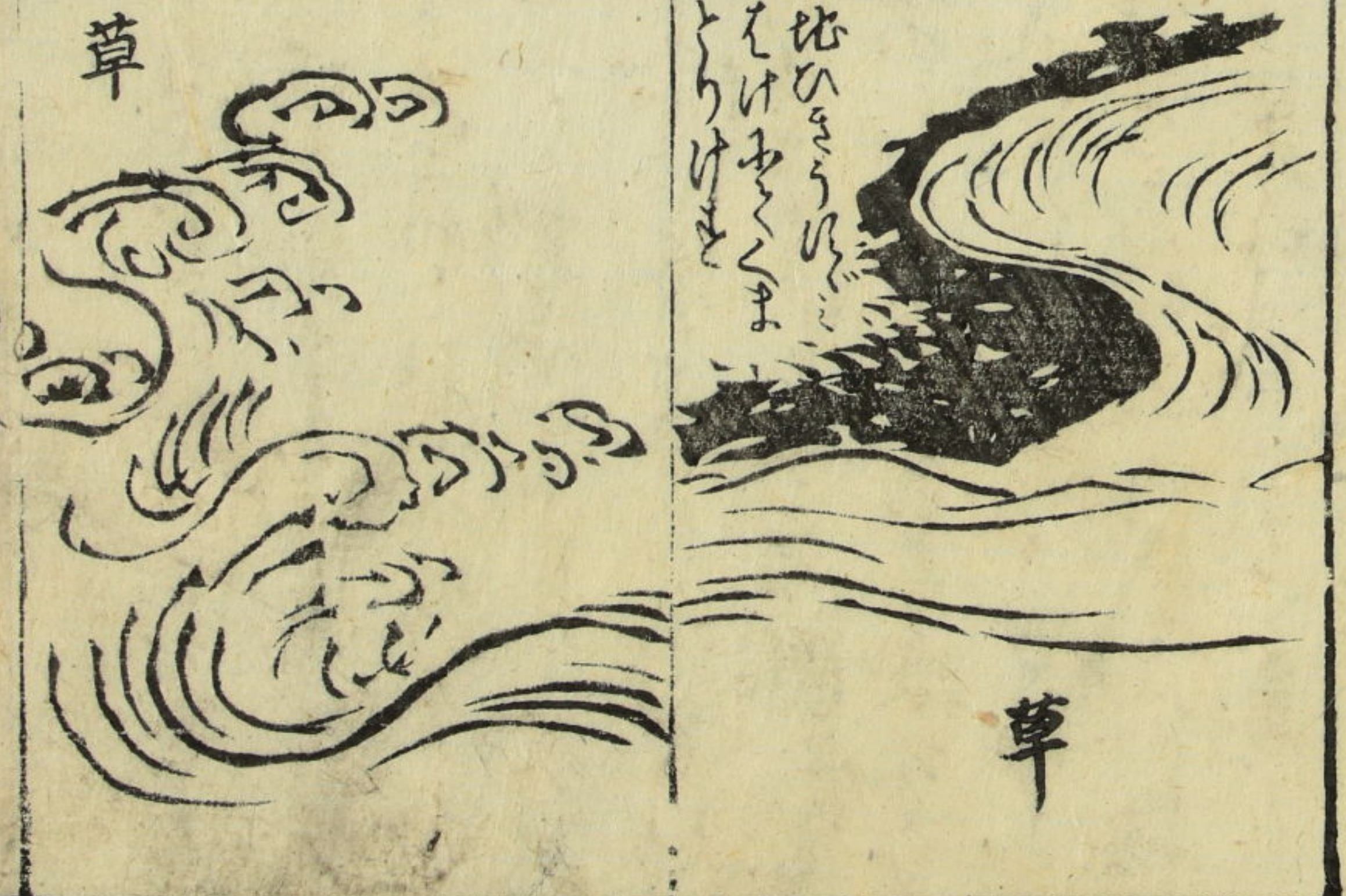
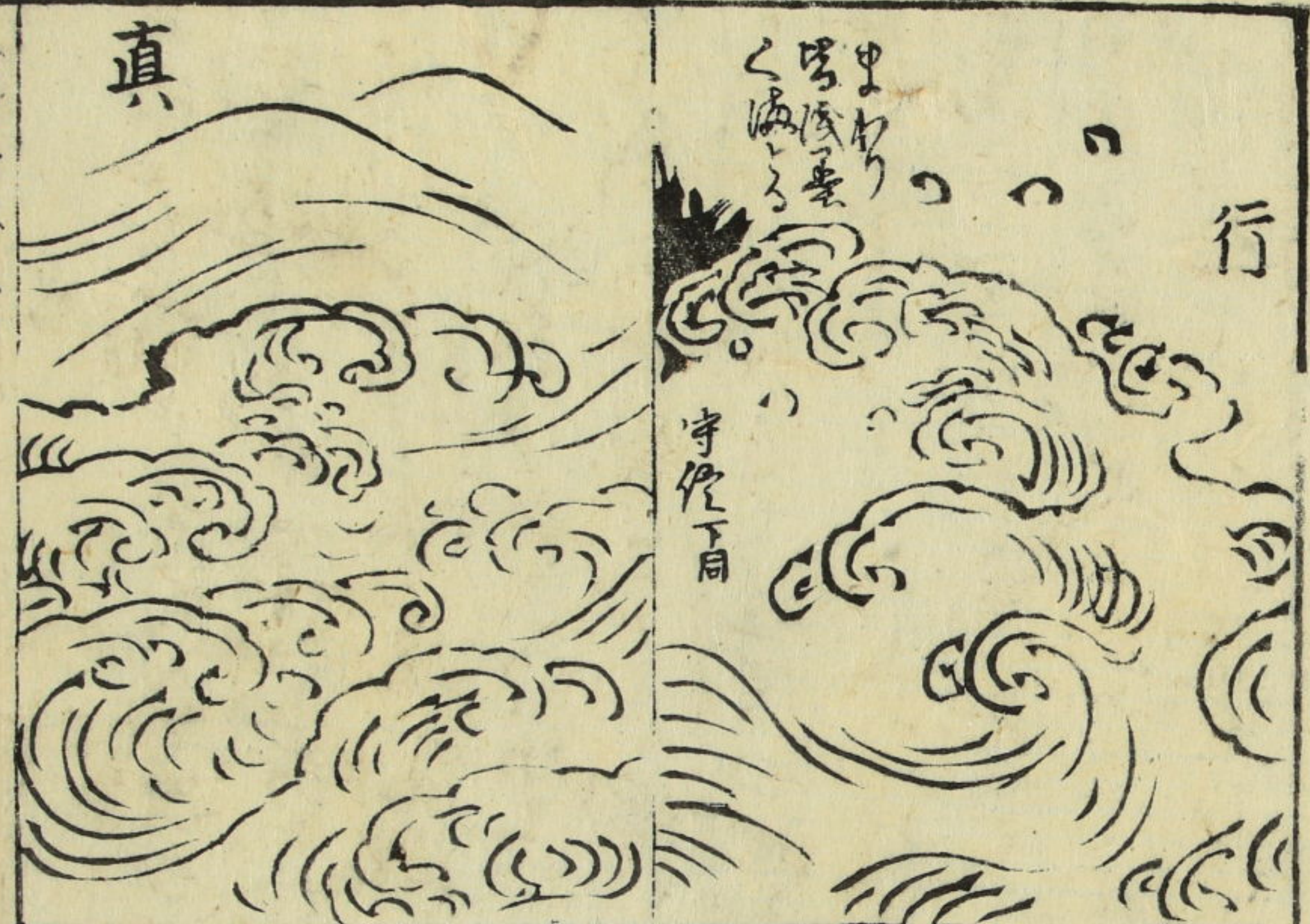


守信筆



水

名のこら描ぐはものかれは深分と用へ。まきと強し深分この  
 虫形を強し使ふよこ格形この畫は緝事とめり全流成とふに  
 て波れ文を去へ。常に之乾澱を淡らふと引へ。水の深分を  
 いや。又淡彩中彩木の絵よこふん物をせざりも。あま  
 筆に胡粉と引ば重し。格とまか。つるは。ふん。と。引。ど  
 わら。やうに。電。起。て。使。師。曰。池。名。流。水。か。も。暖。く。れ。海。と。い。ふ  
 使。れ。曲。と。り。さ。う。早。し。只。と。れ。強。の。か。と。考。へ。さ。あ。り。深。分。と。く  
 物。柄。と。こ。や。な。り。下。帯。弁。さ。う。良。し。大。阪。の。こ。見。り。こ。丸  
 質。強。の。真。行。草。ふ。ふ。う。て。應。じ。る。色。に。ま。く。深。分。を。強  
 淡。分。れ。と。ま。ま。ふ。ん。を。れ。統。て。わ。く。濃。く。守。淡。く。さ。う。と。あ。り。ん



中わり  
 時後葉  
 くぬい  
 守作下目

比ひさうひ  
 をけあくま  
 とりけき





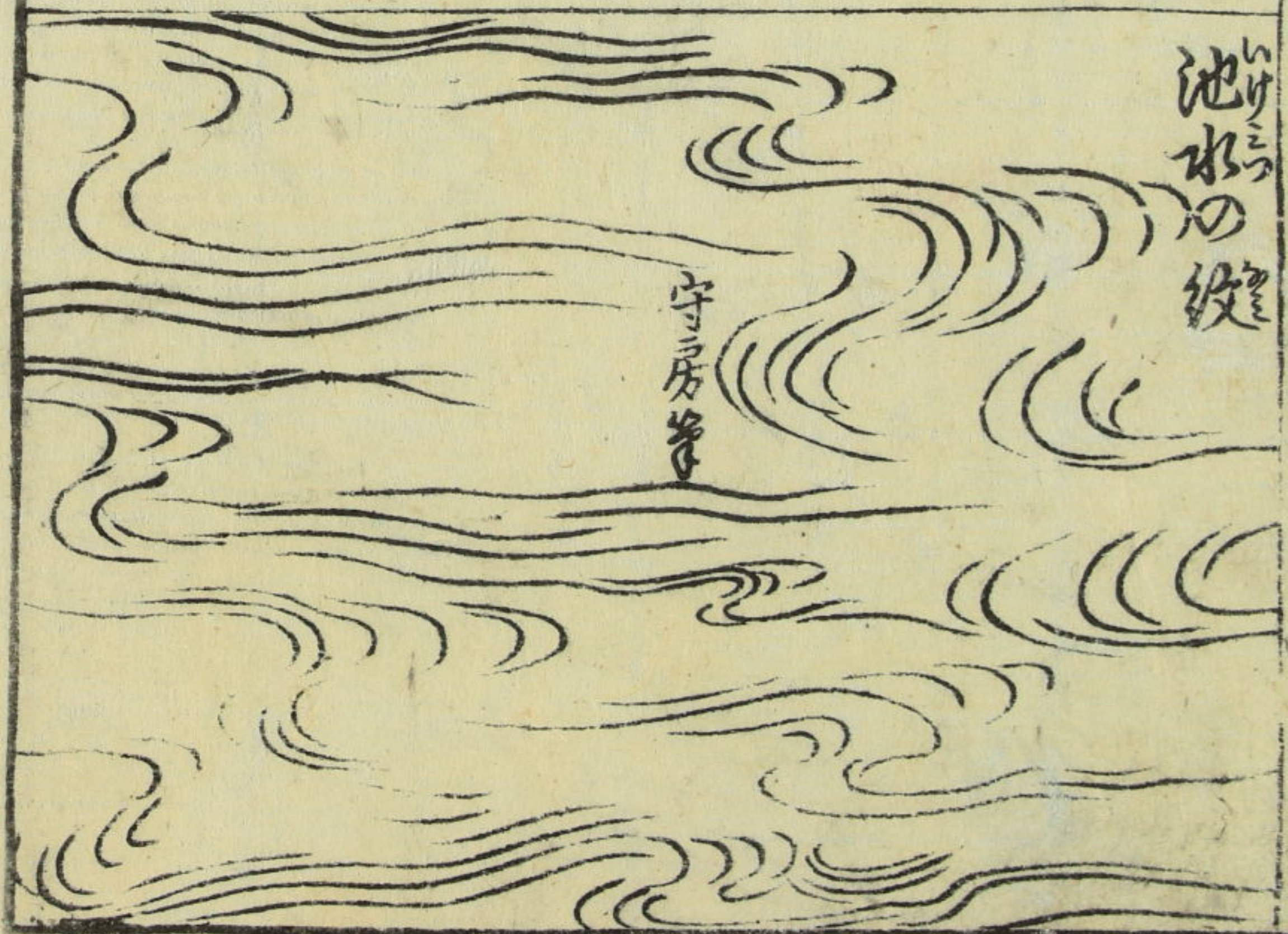


青海の波



法印探幽行年七十三歳筆

池水の紋



守房筆

四時花部

春

白梅之白緑々々  
波骨之浅ぬり加粉  
にて端と括取と思  
ふけと又こふと退  
ゆり曲とら消とる  
是れ氣れ脱て所し  
花中の又穴へ白緑ぐ  
柳汀よし括花葉ハ  
る葉多し



書

書



少人量い少んつきて花葉とぬる（花葉は）中代星線き○梅樹松より  
 へ初ま去へ白源わいらう合葉出さとうすわう末すし浅墨寄ふて仕立  
 小枝うひし針塗成の葉汁朱墨赤く出入せり○梅樹貼立凡  
 付立とふ先程の色をゆりてか初にすしと用は先白源を以墨ど加へて  
 塗云しととみまく描とこと扼ハ皆淡をみとる○紅梅花 総の花  
 瓣と肉色ふて浅没骨て瓣とに中の方より生多しあくくぬれぬし湖粉  
 いて退曲より其外ハ白松も同一苞（葉）とゆり生多し括二之のさぬい枝  
 小源と包ととみ○紅梅貼立花ハ墨以用して肉色を以圍と化潤脂  
 ちく花瓣と描起仕立とと存同一色葉葉の対ハ同一からけ  
 海棠花  
 花と生多しこの具もく没骨て生多し花れ中の方より曲より

躑躅

守信子



紅色肉色  
 ゆり朱めり  
 生多し  
 上の一瓣ハ  
 同つと  
 他亦ハ都と  
 引て包

桃

種類



花ハ生多し  
 曲中の方より  
 包ハ一あり  
 生多し

海棠



櫻



枝をさく  
 やさし  
 花ハ三まも







虫へ一又不地毛邊紙よ虫よ生無  
 花と燈とと虫染の若緑葉す  
 深液虫の(虫)け虫にと一筆物と  
 云凡一筆のなぐり物い若事と雞  
 然大袖いれ者も上功は終るとみ  
 眞筆の陰の袖字れ者も似せ易  
 て似るとなり一上巧ふあるとんど  
 描とあつた浮沈ト緩と彩色  
 此應する加減の深秘あつたぬ  
 もの之固くは柔あつた時申されし  
 雲あり



櫻草

紫白 淡紅  
 七重草九  
 重草も四  
 かり



雞腿兒

長白毛  
 朱  
 白毛  
 朱  
 肉色

白牡丹ハ白緑々  
 しろあめく落發  
 塗粉粉退ぬり隈  
 紅消心ハ白緑塗上  
 に友美と掛実ハ白  
 縁ゆり生えん括心の  
 園ハ二えつた心掛也  
 ○浅紅牡丹 調境  
 具彫り又上とろ  
 ぬら生えんは二  
 三度ハ花壇とせん

法印守信





返張の清(緋)牡丹  
 丹肉色塗又塗  
 次丹に朱を加塗  
 又朱を七膠なり上  
 殺めと調脂やく  
 三篇の油れ物む  
 湯と丹あく返の油  
 する○葉はたの如  
 縁者どぬり割くぬ  
 外の方に塗るぬ  
 けん



又根は小こ州葉と  
 必と描(肉色)となり  
 合葉とかけを  
 おく割曲とり同分  
 括へば白緑にて  
 葉とへべへ他中  
 の方より縁者を  
 けし割るるがよし  
 木は墨のこれ上  
 朱をみ淡をへ



牡丹全體之圖

畫本卷之三

〇二



碎米薺

淡紅白あり  
生あんしぐれ  
立生あん去入  
少ん發白いそ  
付立あいらう  
多し



蔓菁

葉と白根

のりて二

條の白色

多し以て塗

是秘傳の中一條

あけくたたと若かけ  
よてくましらふゆま

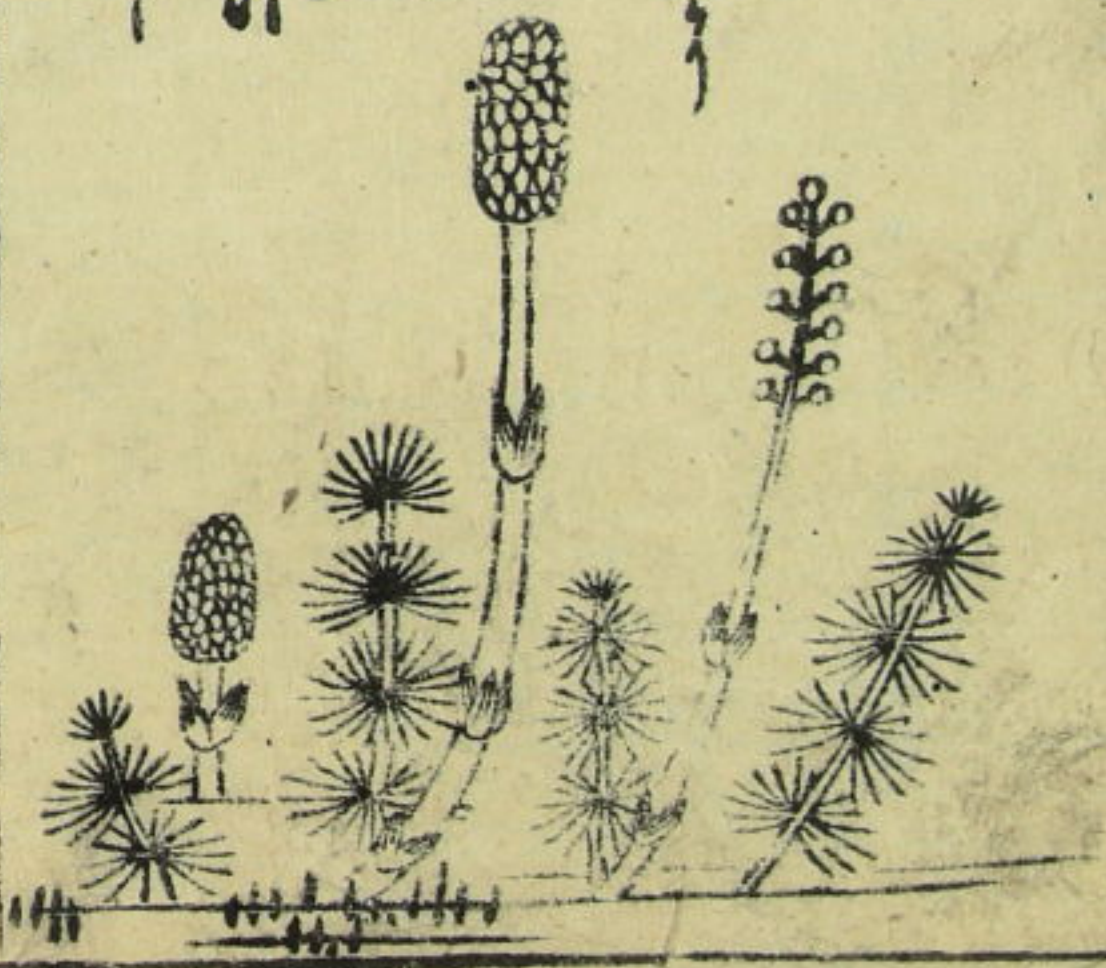


苦緑

根をうん白  
具生あんド  
姜汁かと兼  
りらふし

土筆

肉色付立あり  
白六多し付  
こやんつさ  
朱すこし入  
杉葉ハ黄汁  
よて怪去へ



かぶら

苦強

夏

采囊花 單白

むらさけ千葉のあ

白多し多あり

蜀葵

花の木種は似く

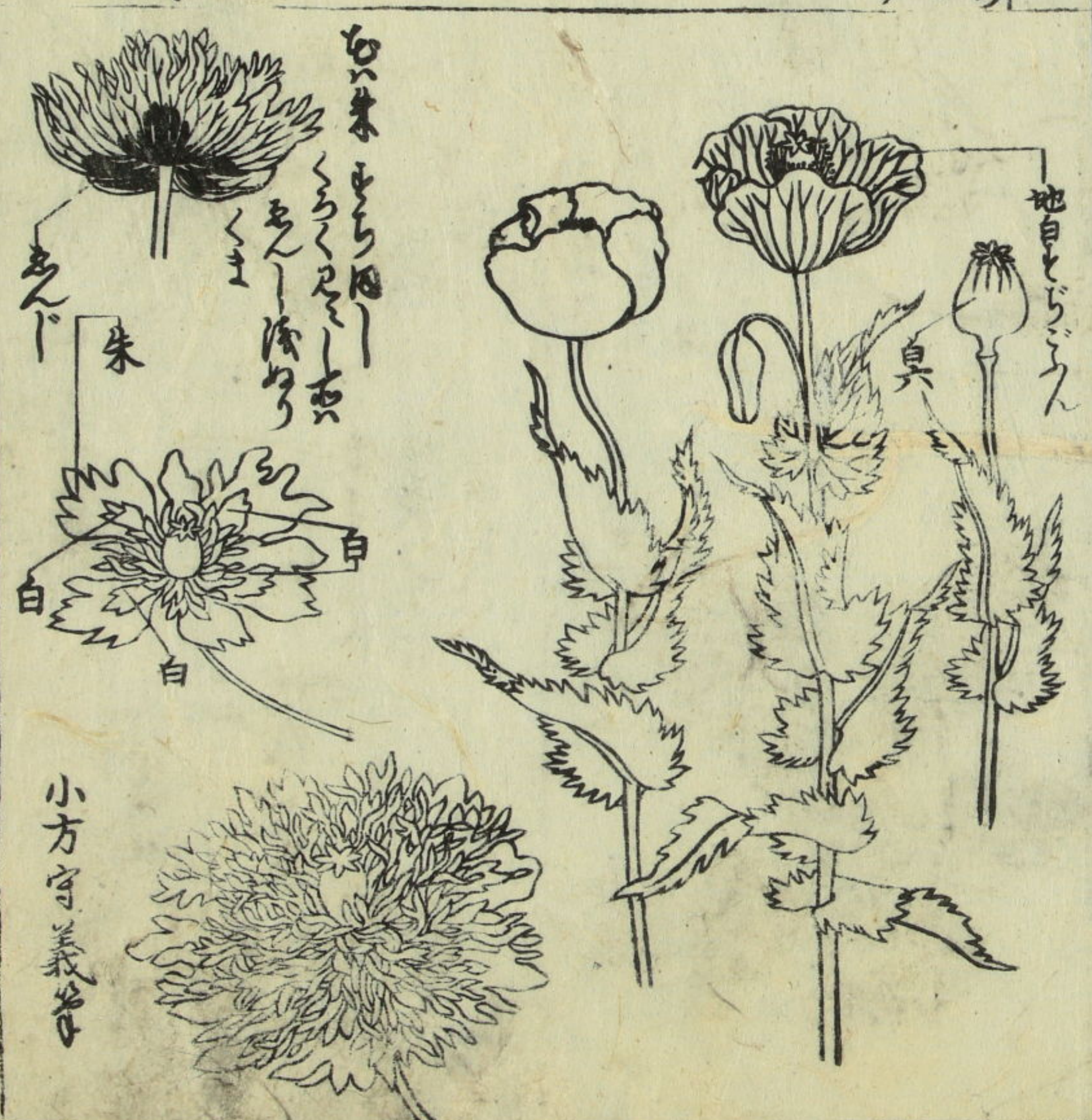
源紅淡紫白

單子葉の多あり

燕子花

紫白黄淡紫赤

数種あり又四時



小方守義







くさくさ

三十三

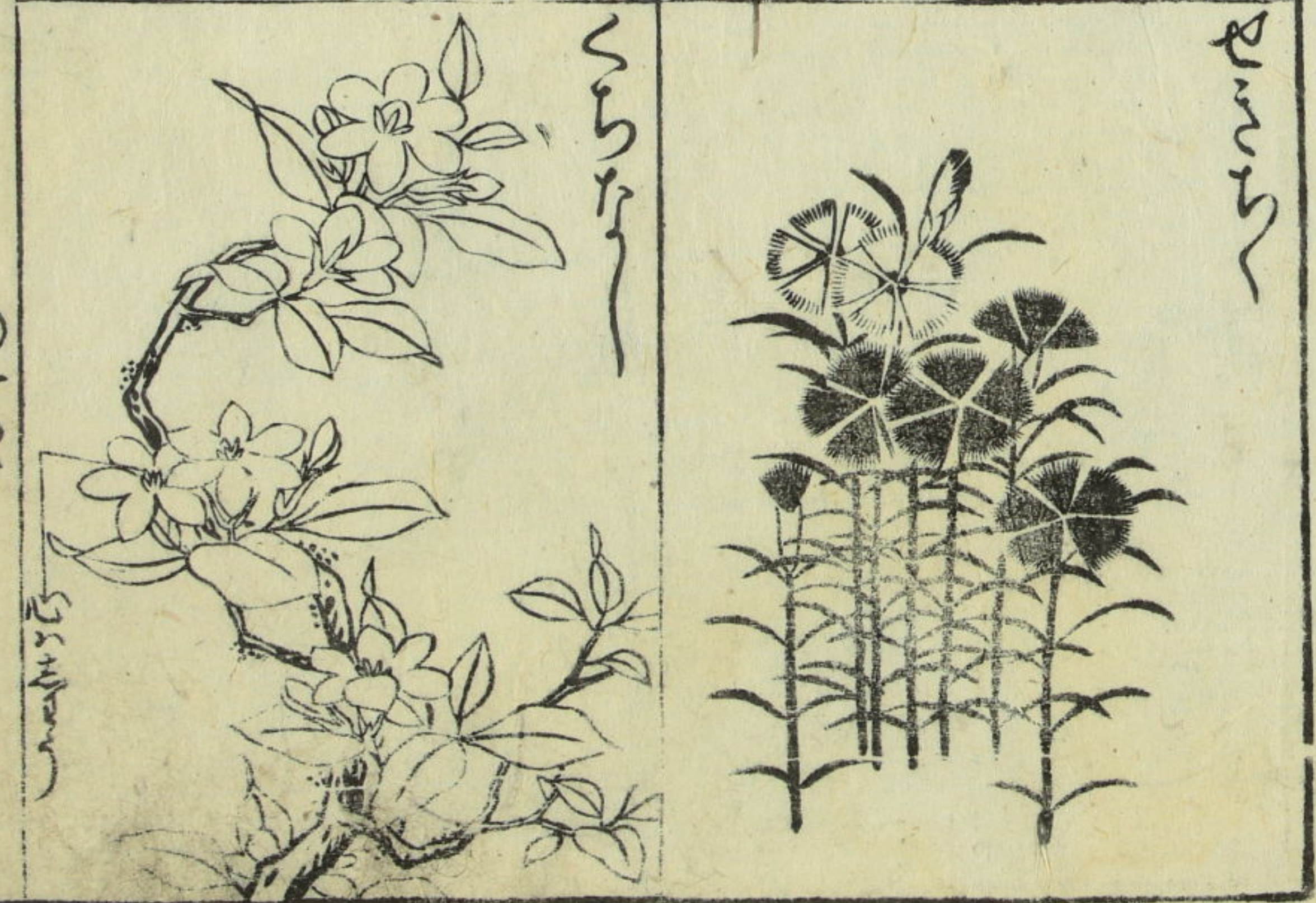
只淨たよて以らう  
 と云へしむし紫白  
 赤斑爛單干あり  
 拖花  
 花六出色白單こ  
 又花小うして千葉  
 あり水拖と云也  
 萱草  
 花と丹臭と夏黄  
 少加へて彫ゆる面  
 の涯ゆる背、海肉



色の如ゆる肉の方以生る下はく  
 隈に外へもまき付中、白線あり  
 草汁が加ゆる紫線あり草汁割曲  
 とりて同まらとむく也

百合

花白し○卷丹 莖より七葉  
 のるに実と生し紅黄花と花上  
 黒斑の點あり肉色あり朱生後  
 ○山丹 五月に花をいらく又細  
 ゆり有む深紅と○鹿子あり  
 生る下はく調脂くは回星とん勢





秋

蓮花 花は紅白粉紅の三色を  
 花心は鬚鬚何れ花弁を生かす  
 白色れ具あま塗られたの夾よ  
 平生急ん淡曲より出し同前と  
 訂へし 弁の方へは 是れ粉紅なり○  
 師曰蓮の花は早咲くより遅  
 く咲くはトリスに必やくは家こ  
 りる描と云ふは葉は陰より出  
 る一蓮房は白緑具にぬる草  
 汁と以て星と化す又星よりか



面よ少し退て周と  
 寄ぬる蓋はこゝろ病  
 葉は白緑あてぬり  
 緑あぬる苦緑よ  
 て蓋と門をさる少  
 退て草汁あてぬり  
 増こは曲よりけは徒  
 者等此の時迄草  
 汁あてたの如く  
 後緑青はさる又  
 不地毛造紙よ雲





畫子の初に指と以て紙と肌皺  
と形に刷毛を漬るを以て深く又一方  
おは深すと敷くさうと云筆に  
深すと合へぬと輕くへ又破  
葉の葉葉に吸く凡  
情あり葉の白緑ぬる葉汁枯村に  
かすつくり

秋海棠

正保の比神唐より長崎  
事

黄蜀葵 畫家よりせん

あうのたう

花生あん下り  
桐脂くぬれ  
花瑞とせん  
こをい



茎白緑葉生あん下り  
とて常れ

藤黄具まで形あり

或は没骨表の方ハ  
さうしてかれ方よ  
曲れ出た花  
より粉粉と退  
隈る裏も同じ  
肉のあり花葉をに  
てさうとひさ外ハ  
粉粉と引心ハ生  
えへに粉粉と  
あつた  
如此又

とろく











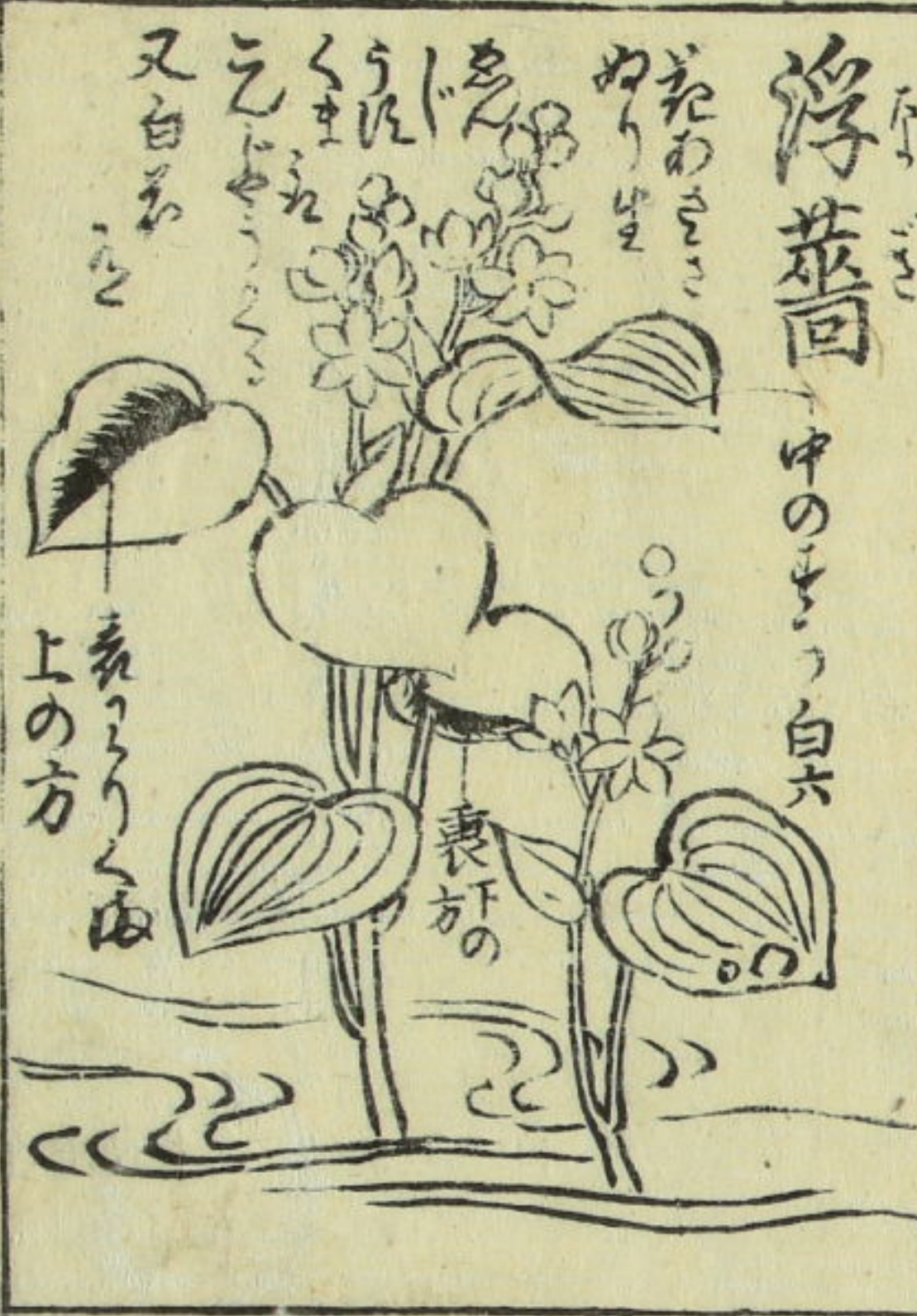


三つん退曲より生  
 多んみく物と引  
 外ハ陰影を引  
 裏とめり六月末迄の如  
 すと引いゝ葉の如く  
 叶のまゝ曲ハ引んぬ  
 葉ハ緑青の如く  
 刺曲も鮮に且直ハ  
 あし及張村  
 に程すー○白む  
 ハ白緑をよえん退  
 ゆり曲れ回とら  
 と引へー



畫  
 卷之二

筆法



畫  
 卷之三

筆法







冬

蘆

冬一名一花



枇杷花

枇杷花  
志とく朱  
とくくマ



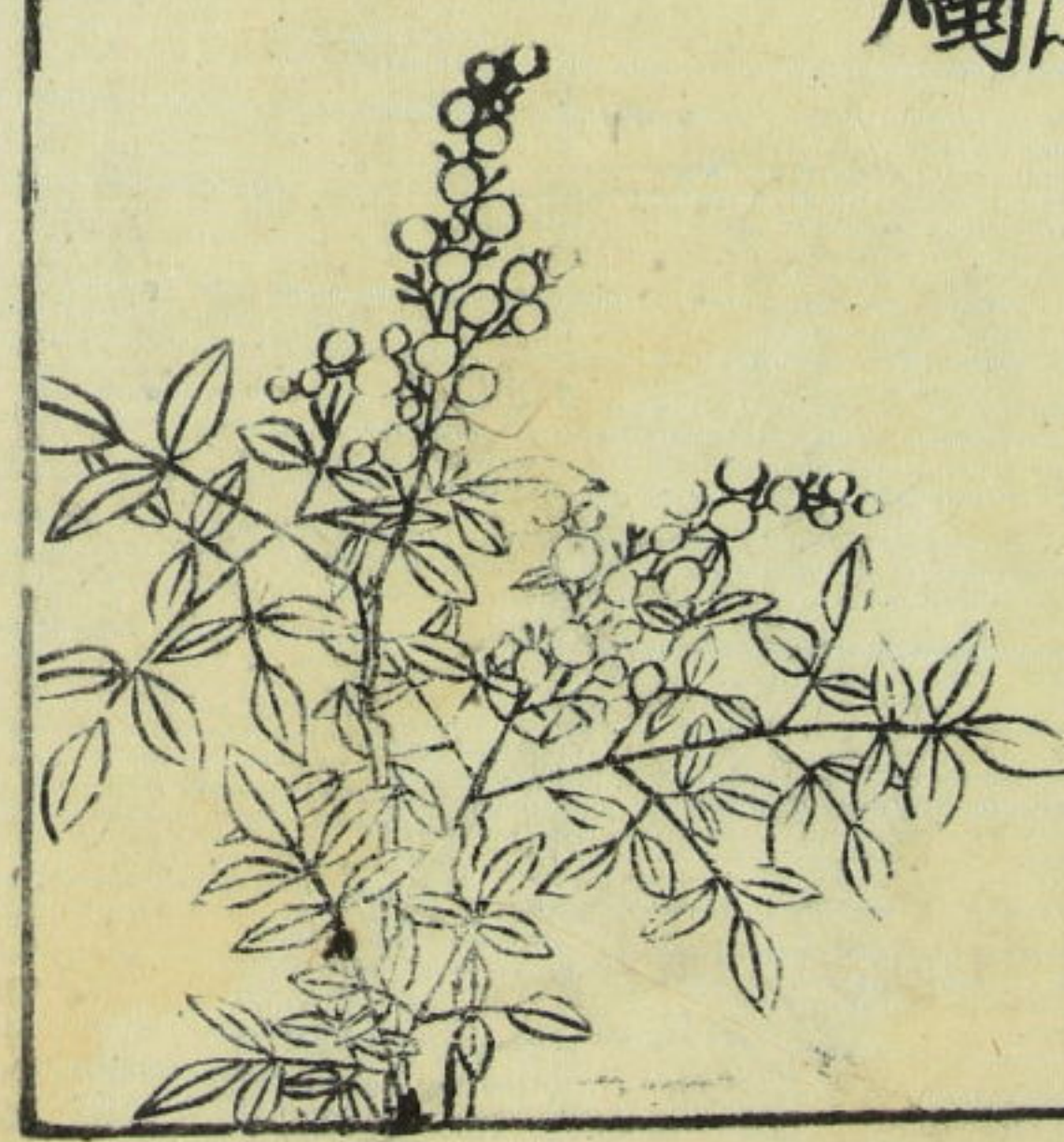
蘆

蘆ハ合葉土



南燭

南燭  
葉土の  
くわう葉  
より合葉土  
くわう葉  
葉土の  
方より  
緑色



水仙

水仙  
花ハ白六つうはく  
ゆりこふん退曲ゆり  
中心ゆり  
肉色ゆり  
二つんはさくま  
花志こりから  
葉六つの上中汁  
ゆりくはゆり同  
すちゆり白六  
あてゆりゆり付



行中彩

同

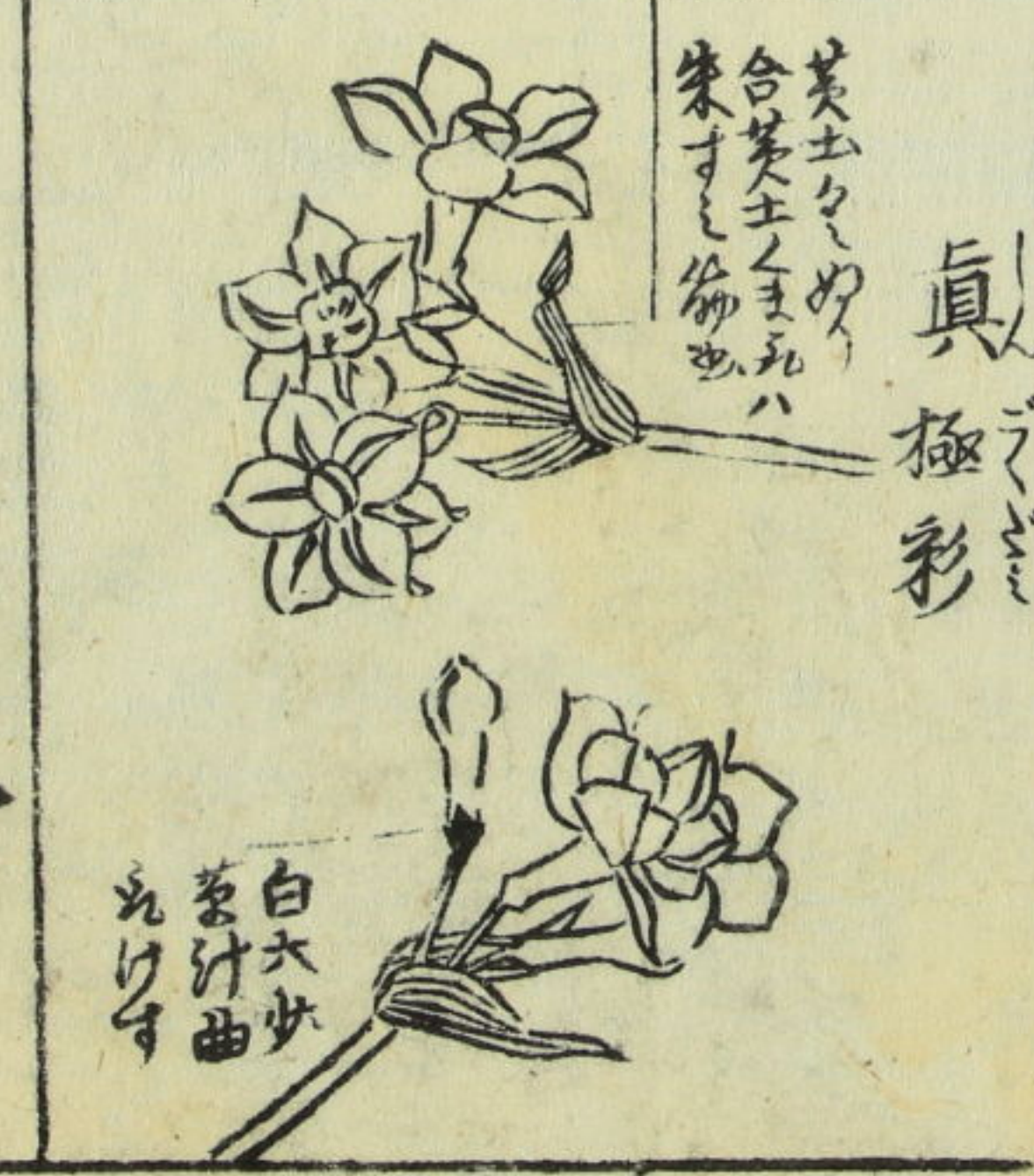
水仙  
花ハ白六つうはく  
ゆりこふん退曲ゆり  
中心ゆり  
肉色ゆり  
二つんはさくま  
花志こりから  
葉六つの上中汁  
ゆりくはゆり同  
すちゆり白六  
あてゆりゆり付



草  
淡彩

同

真極彩  
葉土のゆり  
合葉土のまゆり  
朱すゆり



白六  
葉汁曲  
ゆり

同

水仙  
花ハ白六つうはく  
ゆりこふん退曲ゆり  
中心ゆり  
肉色ゆり  
二つんはさくま  
花志こりから  
葉六つの上中汁  
ゆりくはゆり同  
すちゆり白六  
あてゆりゆり付

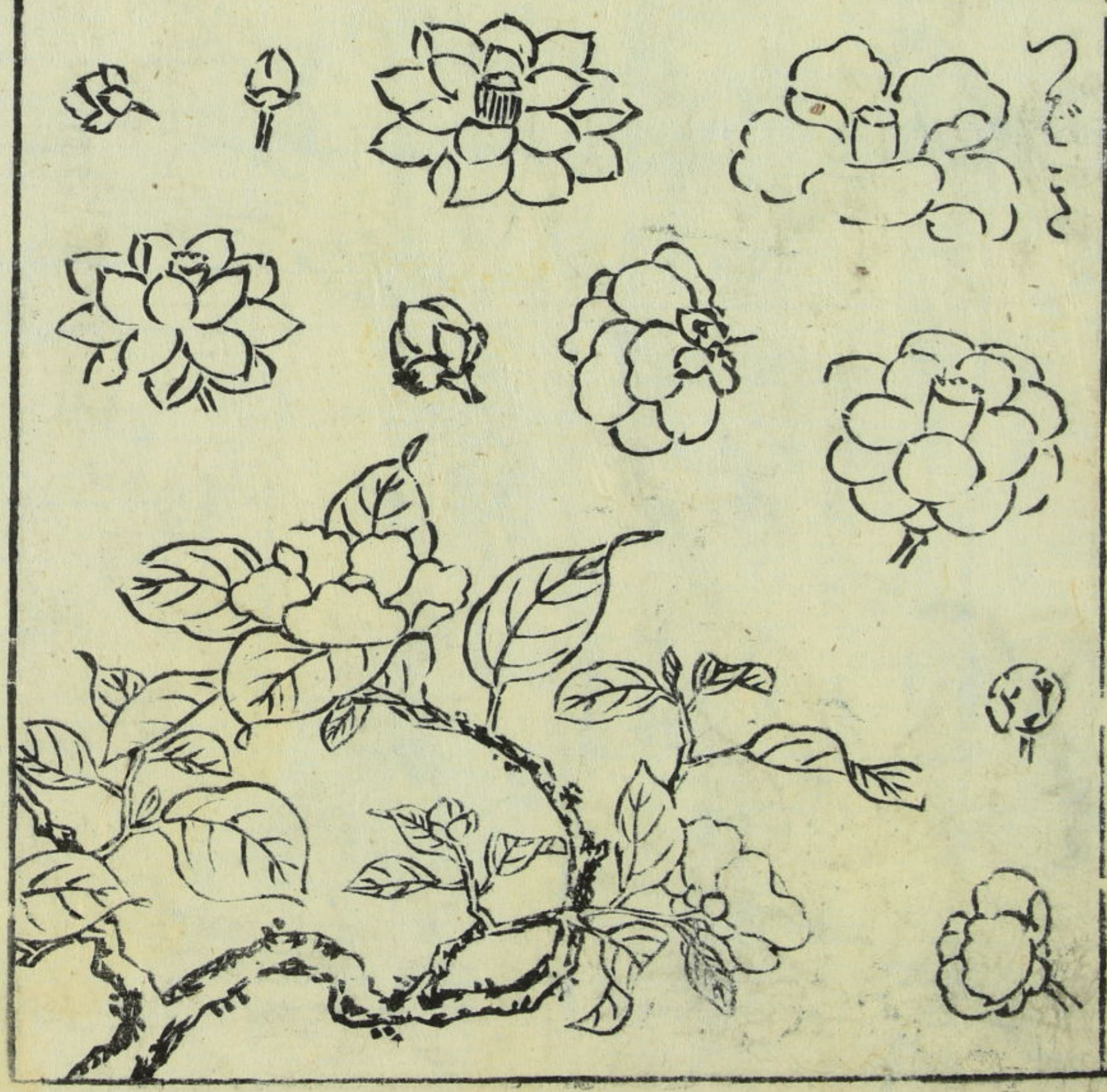


葉  
極彩



山茶花

日丹 肉色を  
 彫塗又一層をわ  
 朱と以て彫塗又一  
 層を塗て生多し  
 にく曲とね出と  
 かのぬしを上に曲  
 とね出(五等)その  
 外(加)のぬ丹を  
 増しり退めりは  
 隅(方) (遍地錦)



生多し其は又淡一篇  
 ゆりてかの方より調脂くぬ出  
 粉粉退曲(三)を(一)紫ハ  
 緑青の上割曲ねとちと引從  
 汁(は)揉茶を濃して毛紙の切ぎ  
 筆(以)て(ひ)ら(り)と(書)し  
 魚骨(イ)紙(ぎ)を(換)ふ(す)一(回)一  
 ○蓋(ハ)肉(色)或(真)赤(も)吉(お)え(つ)て(比)叢(叢)  
 と(知)る(心)の(星)形(像)よく(按)こ(い)  
 氣(以)脱(わ)く(と)之(身)畫(法)の(大)事  
 高(流)の(秘)訣(也)

茶梅花  
 花白  
 海紅花  
 淡濃二色  
 冬より春  
 に至て実  
 真紅なり



本 法 降 枝 並 石 之 圖

此圖のうららとくろくふくにて  
千變万化  
臨機應變  
諸の本  
しとくく  
うくましくをば  
表と裏と交てあふんば  
木と描く大意あり船と  
物なり心を用ひ  
岩木の類として描か  
一變



此圖のうららとくろくふくにて  
千變万化  
臨機應變  
諸の本  
しとくく  
うくましくをば  
二變  
千變万化  
臨機應變  
諸の本  
しとくく  
うくましくをば  
同

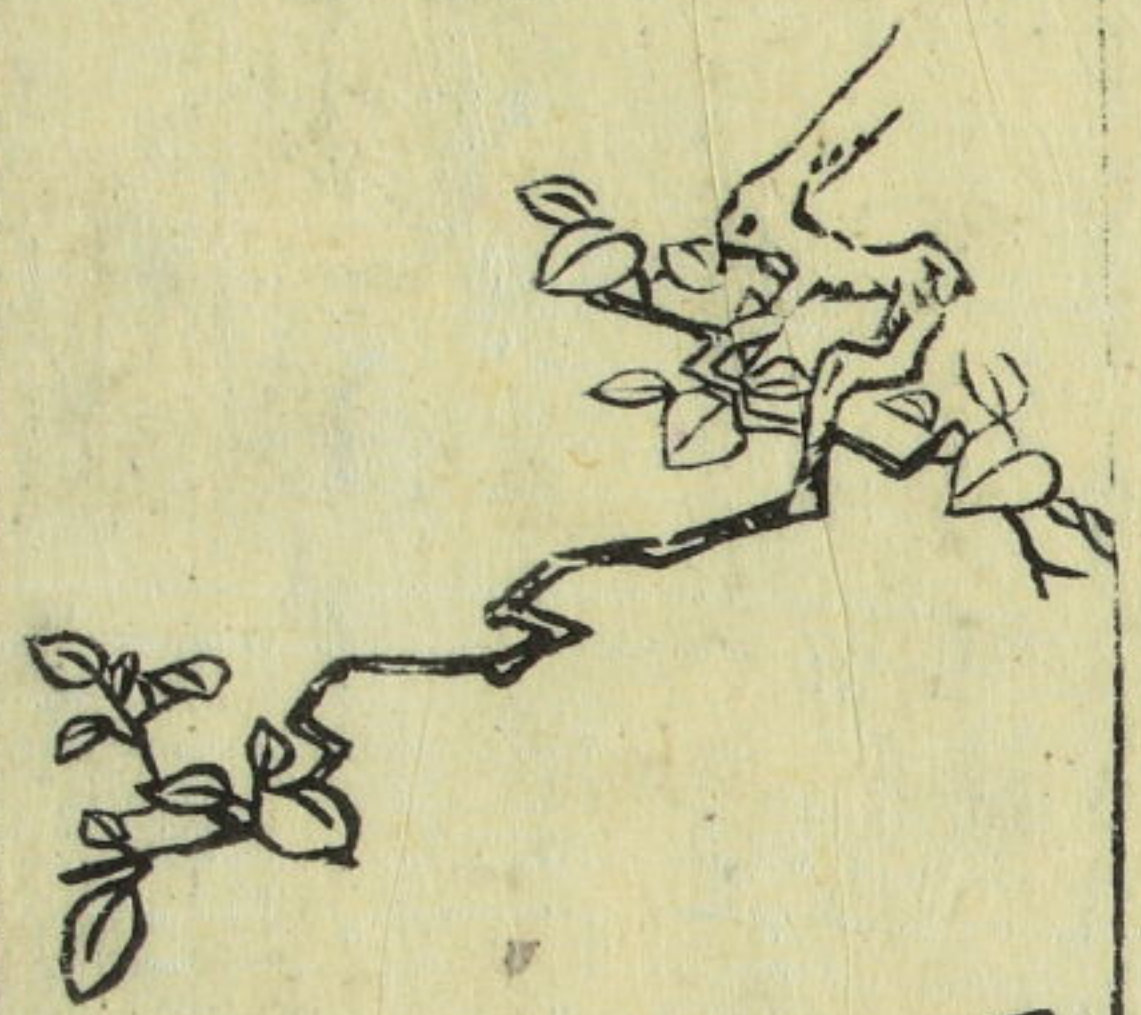


振

守房筆



同右



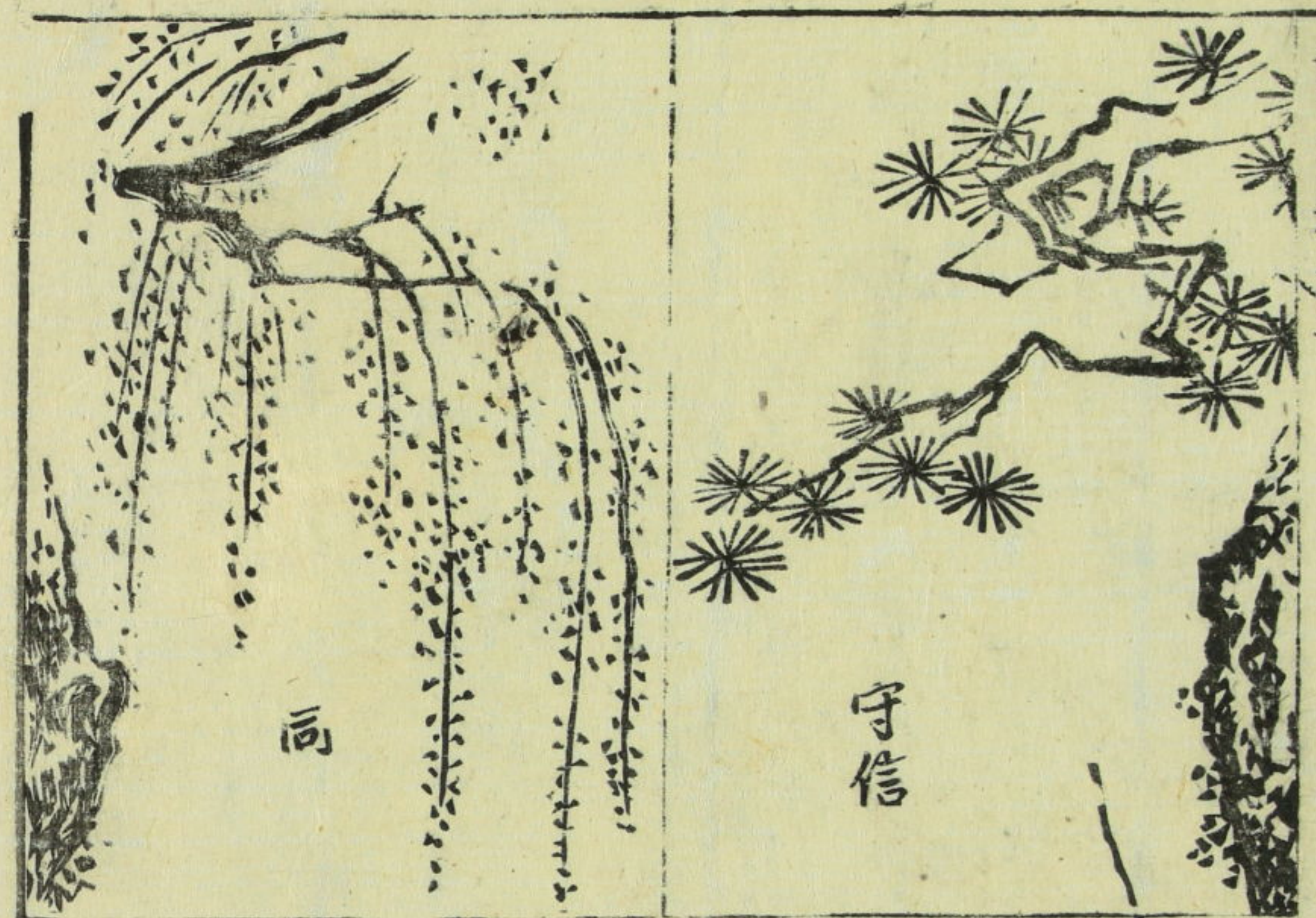
法印守信筆



同右







河

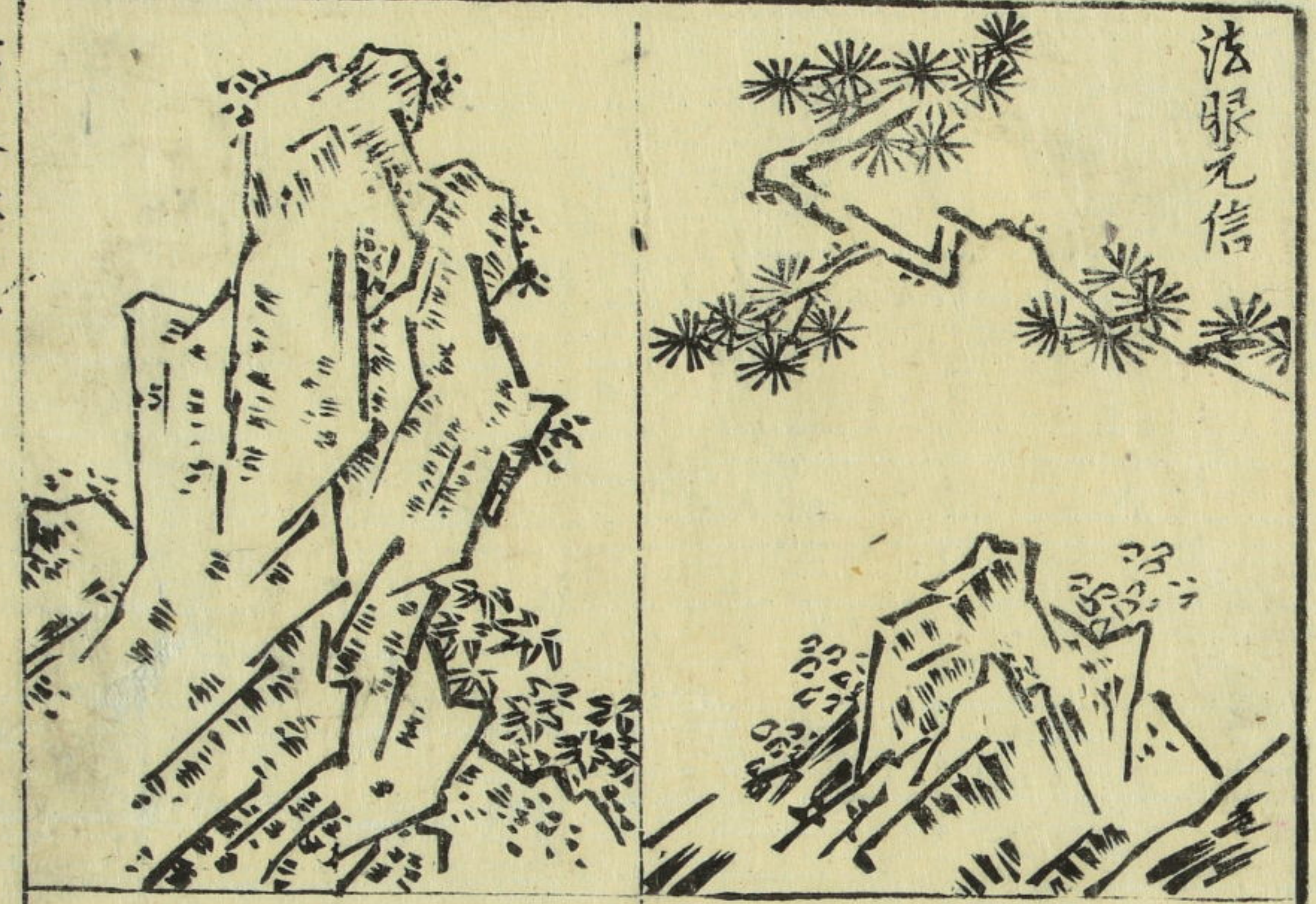
守信



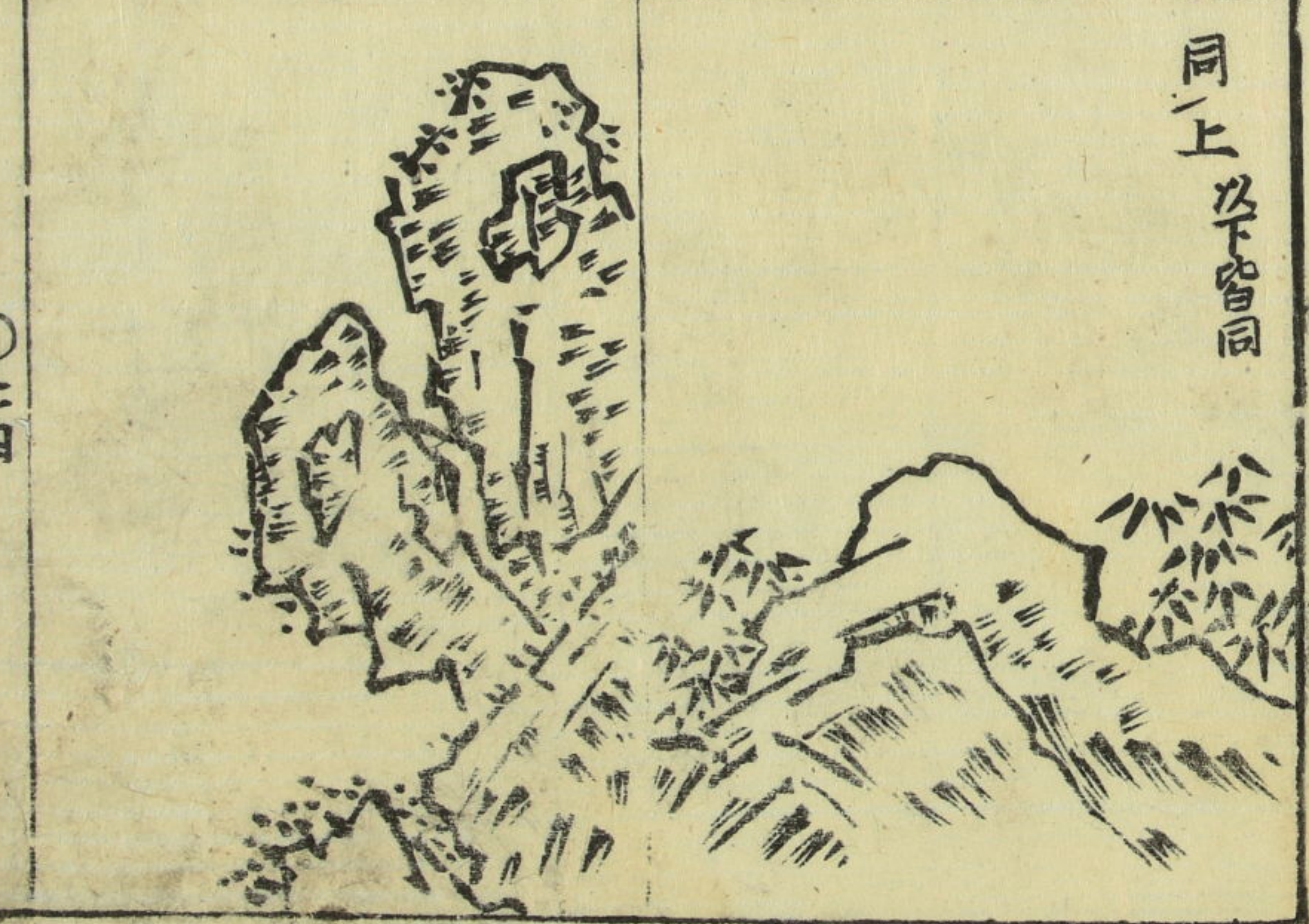
同

同

法眼元信



同上 以下皆同

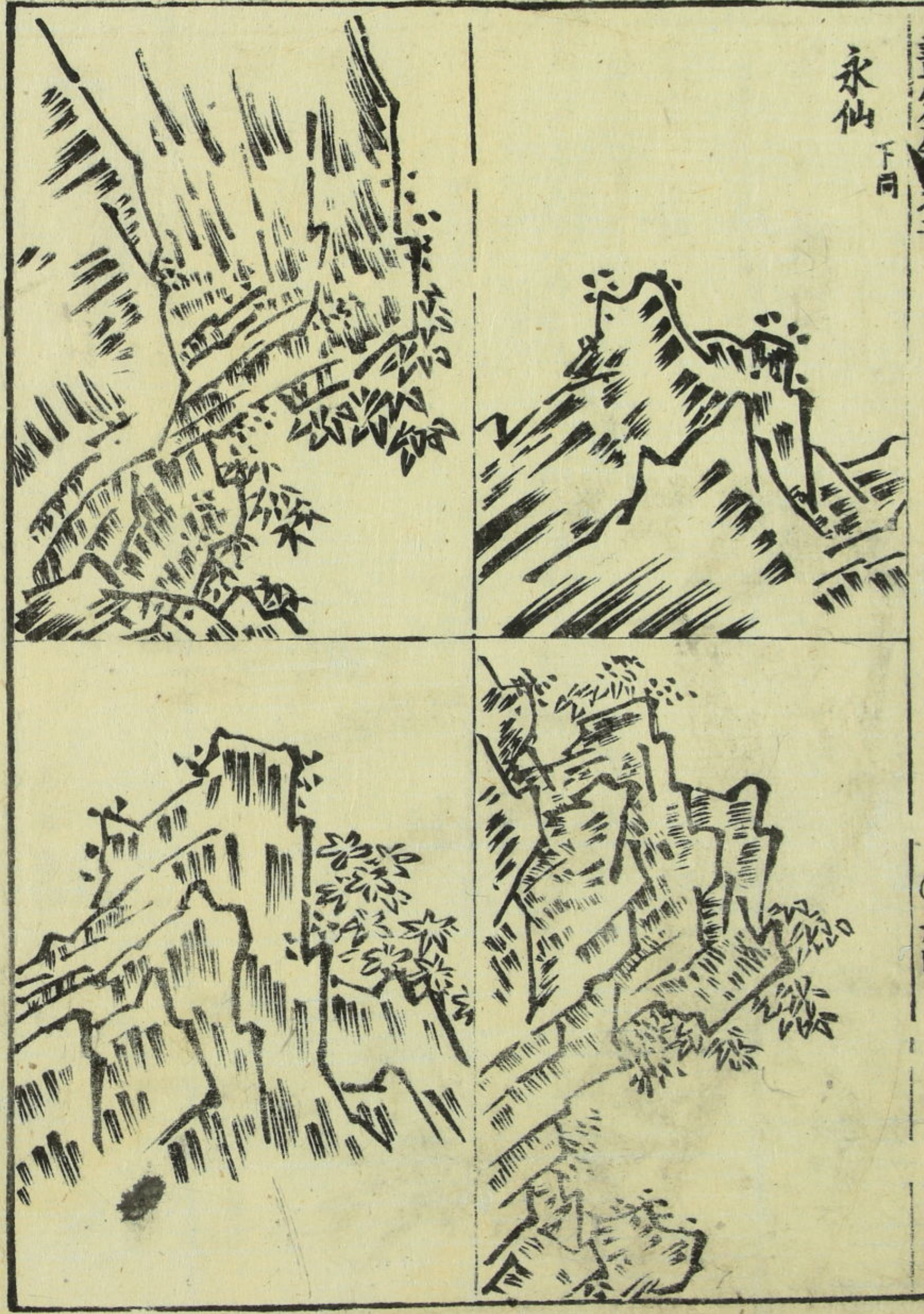


河



永仙

下同



竹と畫に侷用あり  
 陰陽淺淡錯節高低  
 右幹左幹細分鶴爪个  
 葉聚散稚子先梢也  
 飛狐燕二蚕態首四象  
 越且尖ニ平尖大段小段  
 右ハ片片は決りり竹  
 志尤ハ病ありニ才園會  
 八種畫譜圖終宗景也  
 くまーの畫の竹ハ  
 檀芝瑞々凡 いろいろハ  
 東坡といふ上人



東坡

畫譜卷之三

廿九





檀芝瑞



探幽筆





守信象

松の茂枝



守信象

草の茂枝



四時通用

松まつ 和松やまこまつの樹たけ體たいは紫むらさき土つち具ぐに墨すみか加かへてぬり、墨すみ上うへと墨すみみくみくと起おこし又また朱しゆと淡うすと大おほ畧りやくと描かく及および又また神かみより淡うすすみよく去さて及および朱しゆすみも亦またも軽かろくしては、但ただ真ま草くさに依より加かりたる松まつの系けいは草くさ汁じゆに全體ぜんたいとぬり白しろ緑ろくより次つぎに二三二三篇へんもぬり上うへて又また下したの方かたは茂も枝えだより方かたと草くさ汁じゆ



も川

ほく曲まがより葉はがたにすりには、緑ろくより白しろ緑ろくは白しろとてあ、或あるは緑ろくより墨すみか加かへ雷かみなり中なかに松まつのこやしふく葉はと出入でいりるも面白おもしろく師し曰い葉はの葉は柄への莖くきと倒たふる直ただに引ひく葉はは方かたへ交まじへて葉は柄への入いる遠とほひをり、後あとより墨すみの如ごとく兩ふた楎この心こころ持もち、古ふる畫ゑの如ごとく多おほく松まつの茂も枝えだ甚た描かく、此こゝの畫ゑ學者がくしや者ものふく心こころは用もちひたる、

新羅松

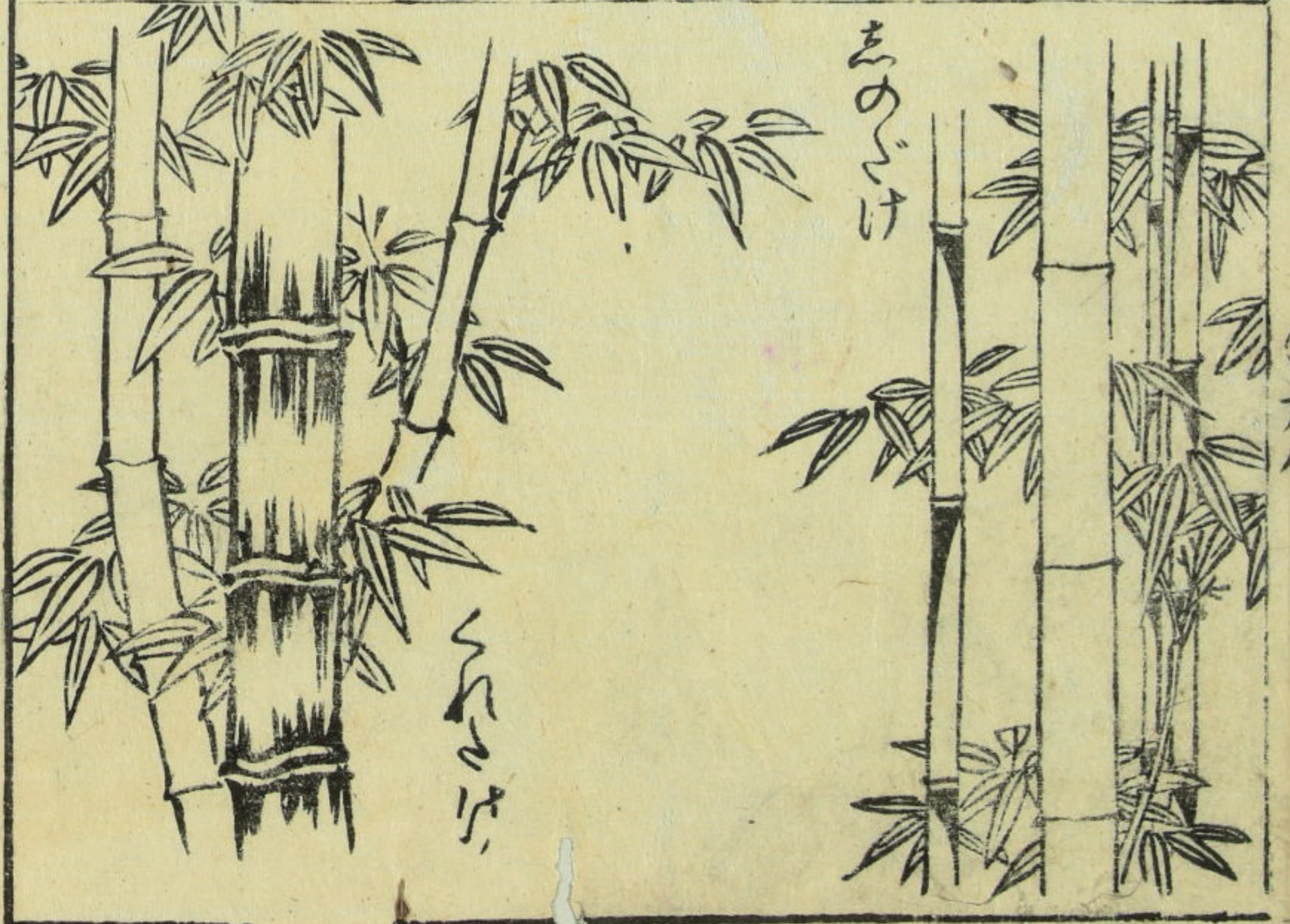


凡木の根は揺る



葉といや一かぬ極よ去へ老緑  
 とや淡志と心中に付点と由は流  
 一瀾伸るるに石の申許り  
 塗へは深草緑と疾く申入又墨  
 がさか死亦まを廻りに少死葉と申  
 む浮沈あわさして下位（或は上も申すも）  
 下は枯葉の下合  
 美玉とゆり朱墨葉 又上に緑青の掛  
 るとよ（或は） 春時の名の緑と  
 中に白緑まゝ八かの如つては  
 四むらふかざりて吟うぬ極よま

蘆竹



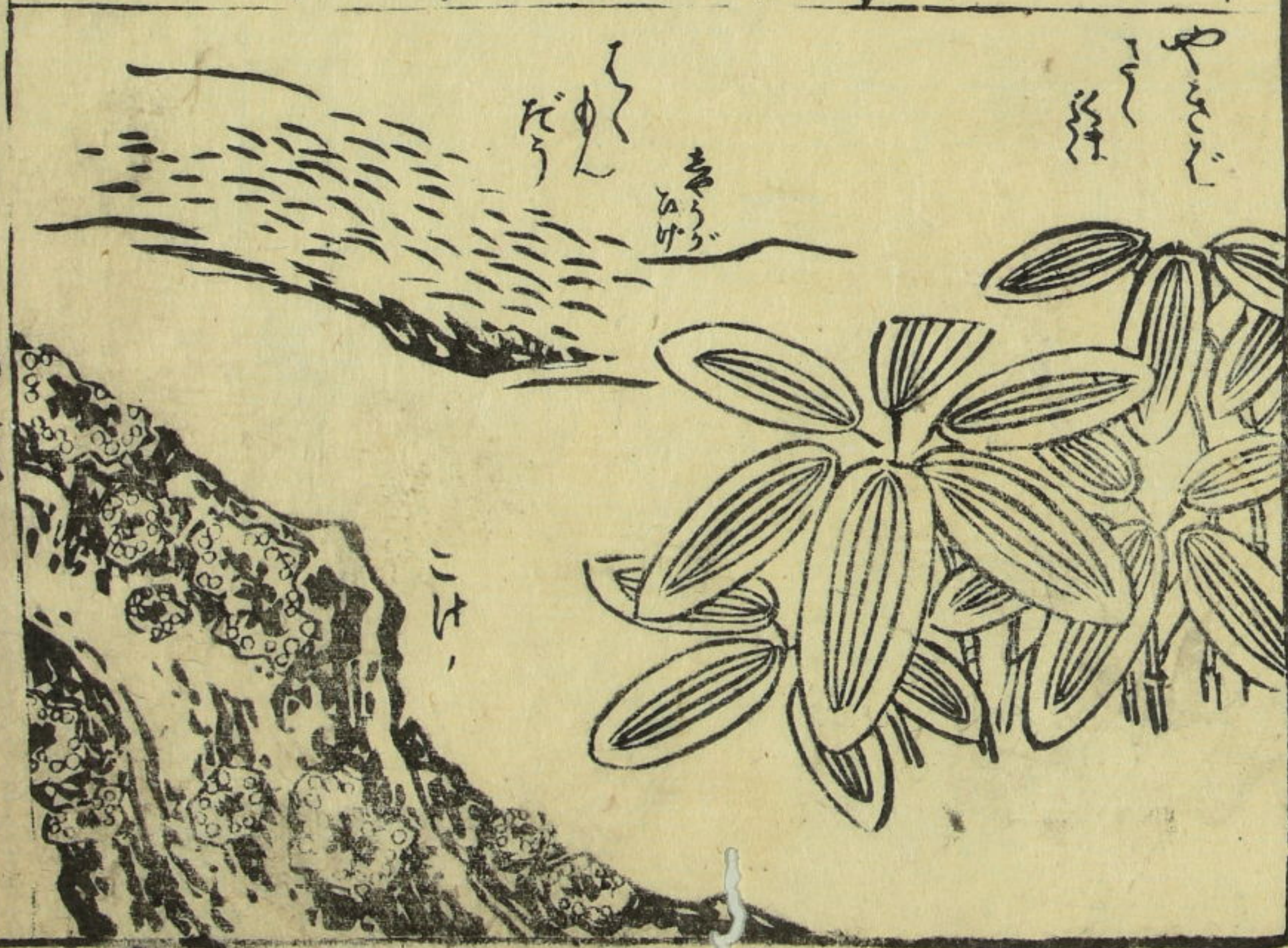
まのさけ

くわさけ

籜ハ黄土具と塗朱すと淡し  
 括又とらと引ら外はあめどし

吳竹

緑青とゆり次々汁と次々節のす  
 と申と三分りと通て曲をた（他竹の）  
 と合すへ（一） 上は淡下は深上下同  
 色よせふふ極よ粒とととやに  
 塗へ（編りり） 下若と淡一後も皆同の得く  
 蔭ハ緑まじ上と中の方越若緑よ  
 て總曲しれとト（毛）ととまぢあは太  
 剛ざらくと描画一とこ





燒又條 墨れよりと黄土具少ぬり墨のなると緑青より  
 ぬり又墨汁出で申と幾廻をわけぬり下は深青をいけて物  
 小用也一それ墨汁の上白緑や墨と作さるるあはれと合  
 て亂ふま一周の黄おぐれ処の合黄土はつと掛り  
 下草 花もれ陰をこに必と下草を描て陰の下にすこ墨  
 ぬるとおひさしてこむるこは嫩緑と引く老緑や中合成り  
 葉の処の合黄土を引いて朱墨と本入ることあり  
 苔 樹や思をこに苔を引くと大切多時いやしお時の  
 墨より引きまゝま一〇真の苔は地と緑より塗周は粉粉を  
 以て墨とつく亂りトらに持ひさるは疎密に於ておのり  
 畫筌卷之二終



